

旭・小島古墳群

— 上前原1～3・5～11号墳 —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ

2004

本庄市教育委員会

旭・小島古墳群

— 上前原1～3・5～11号墳 —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書II

2004

本庄市教育委員会

序

埼玉県の北の玄関口である本庄市は、今春あらたに新幹線新駅が開業し、県北部の交通の要衝として今後ますますの飛躍が期待されています。

本庄市の歴史は非常に古く、江戸時代には中山道の中心的な宿場町として大いに繁栄したことはよく知られていますが、中世には武蔵の有力武士団のひとつであった児玉党の蟠踞するところであり、古代には条里水田が広く整備され、重要な農業生産基盤としての役割を果たしていました。そうした歴史的背景をもつ本庄市は埋蔵文化財にもめぐまれ、本庄台地を中心に旧石器時代から近世まで時代幅も広く、多くの重要な遺跡が分布しています。

本書に報告する旭・小島古墳群も、4世紀代の小型方形墳の形成にはじまり、7世紀代の群集墳の築造に至るまで、300年以上にわたって造営された県内有数規模の古墳群として知られています。本庄市教育委員会では、この旭・小島古墳群の重要性を考慮し、平成元年以来、小島西土地区画整理事業に伴う記録保存の調査に努めてまいりました。今回報告するのは上原原地区に所在する小型の円墳群で、6世紀代に特徴的な「群集墳」の典型的事例と考えられるものです。とくに、上原原5号墳、上原原7号墳は、築造年代が5世紀後半にまで遡ると推定されるもので、旭・小島古墳群が県内でも最古級の「群集墳」として地域の歴史上重要な位置を占めるものであることを物語っています。

今後は、本書が学術研究をはじめ、さまざまな教育活動、生涯学習の場に広く活用されるとともに、将来の埋蔵文化財保護に資することを希望する次第です。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた小島地区の皆様と土地区画整理事業関係の各位に心よりの御礼を申し上げます。

平成16年3月

本庄市教育委員会

教育長 福島 巖

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市小島2丁目および3丁目地内に所在する旭・小島古墳群上原1～3・5～11号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄市小島西土地区画整理事業にともない、事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査地点ごとの調査期間、調査面積、調査原因および調査担当は、それぞれ各節の冒頭に記したとおりである。
4. 整理調査期間は以下のとおりである。
自 平成15年4月1日
至 平成16年1月30日
5. 整理調査および本書の執筆・編集担当者は以下のとおりである。
本庄市教育委員会社会教育課 太田博之
6. 本書に掲載した発掘現場写真の撮影は各発掘調査担当者が行った。
7. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関する資料は本庄市教育委員会において保管している。
8. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)
秋元 陽光 新井 端 石橋 充 稲村 繁 犬木 努 井上裕一 入澤雪絵 内山敏行
江原昌俊 大谷 徹 賀来孝代 加藤一郎 風間栄一 加部二生 車崎正彦 小林 修
坂本和俊 佐々木幹雄 島田孝雄 志村 哲 杉山晋作 清喜裕二 滝沢 誠 鳥羽政之
長井正欣 中里正憲 日高 慎 山崎 武 若狭 徹 大熊季広 鈴木徳雄 外尾常人
恋河内昭彦 金子彰男 田村 誠 徳山寿樹 長瀬歳康 松澤浩一 丸山 修 矢内 勲
9. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 坂本敬信 (平成元・2年度)

塩原 暁 (平成3～10年度)

福島 巖 (平成11～15年度)

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 荒井 茂 (平成元年度)

金井善一 (平成2～5年度)

荒井正夫 (平成6～8年度)

中村 勝 (平成9年度)

渡辺正彦 (平成10・11年度)

倉林 進 (平成12・13年度)

揖斐龍一 (平成14・15年度)

参 事 宮本 清 (平成2年度)

社会教育課長	荒井正夫	(平成元年度)
	坂上英夫	(平成2～5年度)
	中島正和	(平成6～9年度)
	恩田高治	(平成10年度)
	阿部均	(平成11・12年度)
	田中靖夫	(平成13・14年度)
	吉田敬一	(平成15年度)
同課長補佐	中島正和	(平成元年度) [文化財保護係係長兼務]
	吉田敬一	(平成2～6年度)
	小暮浩一	(平成7・8年度)
	中村文男	(平成9～11年度)
	福島保雄	(平成12～14年度)
	桜場幸男	(平成15年度)
文化財保護係		
係長	中島正和	(平成元年度) [社会教育課長補佐兼務]
	長谷川勇	(平成2～6年度)
	増田一裕	(平成7～14年度)
	吉田稔	(平成15年度)
文化財保護係	長谷川勇	(平成元年度)
	増田一裕	(平成元～6年度)
	太田博之	(平成元～15年度)
	赤尾直行	(平成元～3年度)
	佐藤好司	(平成3～9年度)
	遠藤優子	(平成4～6年度)
	塩原浩	(平成7・8年度)
	関根君江	(平成9・10年度)
	我妻浩子	(平成11～15年度)
	松本完	(平成12～15年度)
	町田奈緒子	(平成13～15年度)
調査担当者		
文化財保護係	長谷川勇	(平成元・2年度)
	佐藤好司	(平成3～9年度)
	増田一裕	(平成10～14年度)
	太田博之	(平成12～15年度)
	松本完	(平成12～15年度)
	町田奈緒子	(平成13～15年度)

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国土標準座標第IX系に基づく。
2. 各遺構における方位針は座標北を示す。
3. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。

〔遺構図〕

遺構平面図…1/80・1/160

土層・遺構断面図…1/40

〔遺物実測図・拓影図〕

埴輪…1/4

須恵器…1/4

土師器…1/4

その他のものについては、個別にスケールを示した。

4. 本書の本文中および観察表で用いた円筒埴輪の各部名称は、突帯を下から上に向かって順に第1突帯、第2突帯、第3突帯とし、各段を基部の側から口縁部に向かって順に第1段、第2段、第3段……とした。
なお、円筒・朝顔形埴輪の観察表は本文末尾に一括して記載した。
5. 円筒・朝顔形埴輪観察表の「底部・巻き」の「左・右」は、基部を成形する粘土板の巻き合わせの方向を示し、製作者側（上）からみて左端を上重ねたものを「右」、右端を上重ねたものを「左」とした。
6. 円筒・朝顔形埴輪観察表の「底部・圧痕」の「棒状」、「木目状」等の記載はあくまでも視覚的な分類によるものである。
7. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
8. 遺構断面図のスクリーントーンは地山のローム層を示す。
9. 観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版『標準土色帖』2000年版によった。
10. 本書で使用した地形図は国土地理院発行1/50,000「高崎」に加筆したものを用了。
11. 本書で使用した位置図は本庄市発行「本庄市都市計画図6」1/2,500に加筆したものを用了。
12. 本書の引用・参考文献は本文末尾に一括して記載した。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 旭・小島古墳群の概要	5
III 調査の成果	
1 上前原1号墳	10
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
2 上前原2号墳・上前原11号墳	15
上前原2号墳 (1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
上前原11号墳 (1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
3 上前原3号墳	21
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
4 上前原5号墳	26
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
5 上前原6号墳	44
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
6 上前原7号墳	47
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
7 上前原8号墳	54
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
8 上前原9号墳	59
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
9 上前原10号墳	60
(1) 遺構 (2) 遺物 (3) 小結	
IV 結 語	65

引用・参考文献

写真

挿図目次

図1	周辺の遺跡	3
図2	旭・小島古墳群分布図	7・8
図3	調査区位置図	9
図4	上前原1号墳	11・12
図5	上前原1号墳土層断面図	13
図6	上前原1号墳出土円筒埴輪実測図	14
図7	上前原1号墳出土土器実測図	14
図8	上前原2号墳土層断面図	16
図9	上前原2・11号墳	17・18
図10	上前原2号墳出土土器実測図	19
図11	上前原11号墳土層断面図	20
図12	上前原3号墳土層断面図	22
図13	上前原3号墳	23・24
図14	上前原3号墳出土土器実測図	25
図15	上前原5号墳	27・28
図16	上前原5号墳土層断面図(1)	29
図17	上前原5号墳土層断面図(2)	30
図18	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(1)	31
図19	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(2)	32
図20	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(3)	33
図21	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(4)	34
図22	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(5)	35
図23	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(6)	36
図24	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(7)	37
図25	上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(8)	38
図26	上前原5号墳出土円筒埴輪拓影図(1)	39
図27	上前原5号墳出土円筒埴輪拓影図(2)	40
図28	上前原5号墳出土朝顔形埴輪実測図・拓影図	41
図29	上前原5号墳出土土器実測図	42
図30	上前原6号墳	45・46
図31	上前原6号墳土層断面図	47
図32	上前原7号墳土層断面図	48
図33	上前原7号墳	49・50
図34	上前原7号墳出土円筒埴輪実測図・拓影図	51
図35	上前原7号墳出土形象埴輪実測図	52
図36	上前原7号墳出土土器実測図・拓影図	53
図37	上前原8号墳土層断面図	54
図38	上前原8号墳	55・56
図39	上前原9号墳	57・58
図40	上前原9号墳土層断面図	60
図41	上前原10号墳	61・62
図42	上前原10号墳土層断面図	63
図43	上前原10号墳出土円筒埴輪実測図・拓影図	64
図44	上前原10号墳出土土器実測図	64

写真目次

- 写真1 上前原1号墳A地点 調査区全景 [西から]
上前原1号墳A地点 周堀検出状況 [南から]
上前原1号墳A地点 周堀検出状況 [南から]
- 写真2 上前原1号墳A地点 周堀覆土堆積状況 [西側周堀北壁]
上前原1号墳A地点 周堀覆土堆積状況 [南側周堀東壁]
上前原1号墳C地点 周堀検出状況 [北東から]
- 写真3 上前原2号墳A地点 調査区全景 [南西から]
上前原2号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]
上前原2号墳B地点 調査区全景 [北東から]
- 写真4 上前原2号墳C地点・上前原1号墳A地点 調査区全景 [南から]
上前原2号墳C地点・上前原1号墳A地点 調査区全景 [北東から]
上前原2号墳C地点 周堀検出状況 [南から]
- 写真5 上前原3号墳A地点 調査区全景 [北東から]
上前原3号墳A地点 調査区全景 [南西から]
上前原3号墳A地点 周堀検出状況 [北から]
- 写真6 上前原3号墳A地点 周堀検出状況 [西から]
上前原3号墳A地点 周堀覆土堆積状況 [南側周堀]
上前原3号墳A地点 周堀内土坑検出状況 [南側周堀]
- 写真7 上前原3号墳B地点 調査区全景 [北東から]
上前原3号墳B地点 周堀内遺物出土状況 [北から]
上前原3号墳C地点 調査区全景 [北西から]
- 写真8 上前原5号墳A地点 調査区全景 [西から]
上前原5号墳A地点 周堀内遺物出土状況 [南から]
上前原5号墳A地点 周堀内遺物出土状況 [北西から]
- 写真9 上前原5号墳A地点 周堀内遺物出土状況 [西から]
上前原5号墳B地点 周堀内遺物出土状況 [南東から]
上前原5号墳B地点 周堀内遺物出土状況 [北西から]
- 写真10 上前原5号墳B地点 周堀内遺物出土状況 [北から]
上前原5号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]
上前原5号墳B地点 周堀検出状況 [北西から]
- 写真11 上前原6号墳A地点 調査区全景 [南西から]
上前原6号墳A地点 周堀検出状況 [南から]
上前原7号墳A地点 調査区全景 [南東から]
上前原7号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]
- 写真12 上前原7号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]
上前原8号墳A地点 調査区全景 [南西から]
上前原8号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]
- 写真13 上前原10号墳A地点 調査区全景 [南東から]
上前原10号墳A地点 周堀内遺物出土状況 [南東から]
上前原10号墳A地点 周堀検出状況 [南東から]
- 写真14 上前原1号墳出土円筒埴輪 1 土師器 1・2
上前原2号墳出土土師器 1
上前原3号墳出土土師器 1・2
上前原5号墳出土円筒埴輪 1・2
- 写真15 上前原5号墳出土円筒埴輪 3～6
- 写真16 上前原5号墳出土円筒埴輪 7～10
- 写真17 上前原5号墳出土円筒埴輪 11～20
- 写真18 上前原5号墳出土円筒埴輪 21～29
- 写真19 上前原5号墳出土円筒埴輪 30～41
- 写真20 上前原5号墳出土円筒埴輪 42～49
上前原5号墳出土土師器 1
- 写真21 上前原7号墳出土円筒埴輪 1～19
- 写真22 上前原7号墳出土形象埴輪 1・2
上前原7号墳出土須恵器 1～5
上前原10号墳出土円筒埴輪 1・2 土師器 1

I 調査に至る経過

昭和63年織茂良平本庄市長から、市内小島地区において「小島西土地区画整理事業」の計画があり、これに関係する「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の協議の申し入れが本庄市教育委員会に出された。本庄市長から協議のあった「小島西土地区画整理事業計画」は、本庄市大字小島、下野堂、万年寺地区におよぶ大規模なものであり、道路、下水道の整備計画域も広範であることから、当該事業地に埋蔵文化財が所在する場合、相当程度の影響が及ぶことが予測された。本庄市教育委員会事務局では、これを受けて、埼玉県教育委員会発行の「本庄市遺跡分布地図」をもとに、当該開発計画予定地における埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。その結果、同地には埼玉県選定重要遺跡である旭・小島古墳群(53-171)の所在することが判明した。

本庄市教育委員会では、このような状況を踏まえ、ただちに旭・小島古墳群の保存について本庄市と協議を開始した。その結果、本庄市教育委員会教育長と本庄市長との間で、旭・小島古墳群の保存に関する「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、1) 事業施行区域は埼玉県選定重要遺跡の範囲内であることから、現在墳丘を有する古墳のみならず事業区全域を協議対象とすること、2) 本庄市指定文化財131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)、136号古墳(蜚影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の4古墳は保留地として公有地化を図るとともに、周堀についても可能な限り現状保存を図ること、3) 前項に掲げた古墳以外については、古墳跡その他すべての遺構について発掘調査の対象とし、確実な記録保存の措置を講ずること、4) 調査の結果、重要な遺構が発見された場合は、保存措置について協議すること等が謳われた。

この協定書の締結を経て、本庄市教育委員会は、昭和63年8月25日付け本教社発第229号で、埼玉県教育委員会あてに当該開発計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。埼玉県教育委員会からは平成63年12月28日付け教文第847号で「埋蔵文化財の取り扱いについて」の回答があり、1) 本庄市教育委員会教育長と本庄市長が締結した「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」とおり実施すること、2) ただし、市指定文化財135号古墳(前の山古墳)の石室については調査終了後に136号古墳(蜚影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の存在する公有地に復原保存し、活用を図ること、3) 調査中に重要な遺構等が確認された場合には、別途協議をおこなうことの指導があった。

現地での発掘調査は平成元年4月から開始し、平成15年度現在もなお断続的に実施している。調査原因は、道路・下水道建設、調整池整備、個人住宅その他建造物の建設、曳家、宅地、駐車場その他の造成工事等開発行為に伴うものが主であるが、131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)等公有地化の図られた区域は、公園としての土地利用が計画されており、これらについては保存整備を目的とした範囲確認調査も実施している。整理調査は発掘調査と平行しつつ平成元年度から断続的に行っている。

なお、各地点の発掘調査ならびに整理調査期間、調査担当者、調査原因・目的、調査面積等の情報は各節の冒頭に記したとおりである。

II 遺跡の環境

1 地理的環境

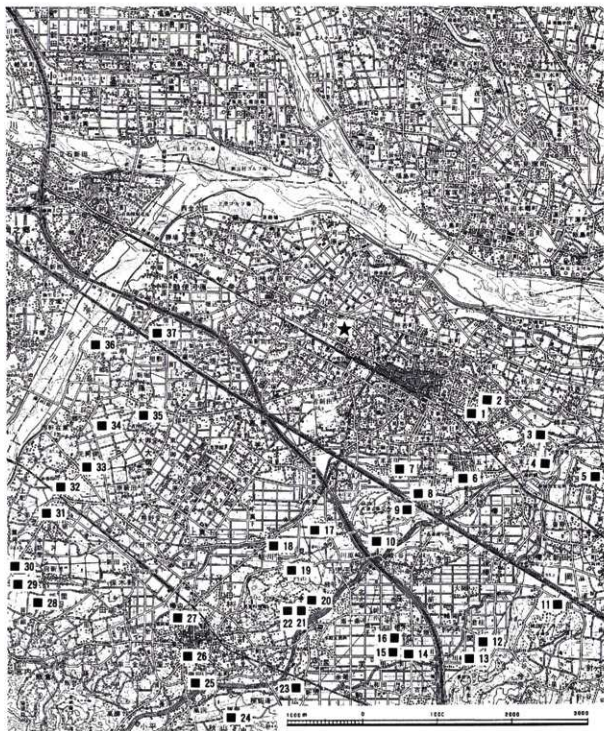
本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地とに区分される。低地部には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。いっぽう、台地部は身馴川扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、楯引台地によって画され、身馴川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県鬼石町浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市大字鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。本書に報告する旭・小島古墳群は、本庄市大字小島から上里町大字神保原にかけての本庄台地扇端部に立地している。台地縁辺部は東流する小山川の浸食により比高差6～10mの段丘崖が発達する。また、周辺の台地上には南南西から北北東の方向に幾筋かの埋没谷があり、狭長な微低地の形成が見られる。

2 歴史的環境

児玉地域は地理的にも上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域である。また、古墳時代にあつては、美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、児玉町ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など当該期における流通・生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期における甕のいち早い導入に見るような先進性や本庄市公藤塚古墳の格子タタキ技法の円筒埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。以下では児玉地域の古墳の変遷を概観し、旭・小島古墳群をめぐる歴史的環境の理解としたい。

児玉町鷺山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である(坂本1986)。女堀川中流域の小丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形状を呈する前方部、出土土器などから、築造は4世紀中葉以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部にのみ穿孔を有し、ナゲ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階のものとする評価も可能であろう。鷺山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長坂聖天塚古墳(径50m)は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む滑石製の刀子の形態などから、前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長嗣化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期の



- ★旭・小島古墳群 1. 塚合古墳群 2. 御堂坂古墳群 3. 赤坂埴輪窯跡 4. 東五十子古墳群 5. 四十塚古墳群
 6. 西五十子古墳群 7. 公御塚古墳 8. 有勝寺裏埴輪窯跡・有勝寺北裏遺跡 9. 前山1・2号墳 10. 塚本山古墳群
 11. 千光寺古墳群 12. 川輪聖天塚古墳 13. 長坂聖天塚古墳 14. 志戸川古墳 15. 道灌山古墳 16. 勝丸稲荷古墳
 17. 鷺山古墳 18. 蛭川埴輪窯跡 19. 金躰神社古墳 20. 生野山古墳群 21. 生野山9号墳 22. 生野山將軍塚古墳
 23. 広木大町古墳群 24. 宇佐久保埴輪窯跡 25. 長沖古墳群 26. 長沖14号墳 27. 八幡山埴輪窯跡
 28. 白岩古墳群 29. 南塚原古墳群 30. 北塚原古墳群 31. 植竹古墳群 32. 関口古墳群 33. 元阿保古墳群
 34. 四軒在家古墳群 35. 大御堂古墳群 36. 下郷古墳群 37. 帯刀古墳群

図1 周辺の遺跡

築造とされる。大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが本庄市教育委員会による2・3次調査の結果一辺30m前後の方墳となることが確認された(南毛古墳文化研究会2001・松本2002)。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器埴が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本庄市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30~40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60~70m程度の前方後円墳となる可能性も考えられている。

中期前葉から中葉にかけては生野山丘陵に児玉町生野山將軍塚古墳(径60m)、児玉町金鑽神社古墳(径68m)、女堀川流域に本庄市公卿塚古墳(径60m)などの大型の円墳が相次いで築造される。児玉地方で古墳がもっとも大型化するのはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葺石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと共伴し、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。これら3古墳に比べやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳(径40m)、小山川上流域の児玉町長沖157号墳(径32m)ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町道灌山古墳(径40m)、同勝丸稻荷古墳(径30m)もこの頃の築造と推定される(美里町1986)。

中期後葉には前段階のような直径60mクラスの大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳(径34m)、生野山丘陵の生野山9号墳(径42m)など30~40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同旭・小島古墳群の三笠山2号墳(径22m)、上前原5号墳(規模未詳)、杉の根7号墳(規模未詳)などいずれも10~20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、岡部町白山古墳群などはやや遅れて、Ⅴ式の円筒埴輪とTK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。さらに、MT15段階に造営が開始される神川町青柳古墳群では、いち早く横穴式石室を導入されることが知られている。

後期後葉段階に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出現してくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

3 旭・小島古墳群の概要

旭・小島古墳群は本庄台地北縁部に立地し、本庄市大字小島、同万年寺から児玉郡上里町大字神保原にかけて分布する。群中央に南南西から北北東方向へ伸びる埋没谷が存在し、現在でも微低地を形成しており、古墳群はこの微低地を隔てて大きく東西二群に分れる。前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、方形墓（方墳）の混成による古墳群で、前期から終末期まで、断続的な造営を認める。以下、時期を追って古墳群の形成過程を概説する。

旭・小島古墳群の形成は西群北半に群在する方墳の築造をもって開始されると考えられる。現在まで20基余りが検出されている。

万年寺つつじ山（辺25m）は、高さ1.7mの墳丘が残存し、確認調査時に表土直下で、刀子、斧、直刃鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。出土地点は墳丘中心から北西方向に大きく外れる位置にあり、埋蔵施設その他の遺構に伴う状況とは認定できない。前方後円墳共通編年4期に該当すると考えられる（南毛古墳文化研究会2001）。

万年寺10号墓（辺24m）では、周堀の立ち上がり部から石剣が出土している。碧玉製とされ、埋蔵施設に伴う状況では確認されていないが、型的には通有の古墳副葬品のうちに見られるものと同形である。

林7号墓、同8号墓は、1辺30mを超える大型の方形墓になると推測され、群集墳を主体的に構成するような小型円墳をははるかに凌ぐ規模を有する。また、林11号墓では木棺直葬の埋葬施設の一部が検出されている。

これらの方形墓は、これまで「方形周溝墓」として一括される場合が多かった（並木1976・菅谷1976 a・埼玉1982）。しかし、円墳とされてきた本庄市北堀前山2号墳が、最近の調査の結果、一辺25m方墳である事実が確認されたことや、万年寺つつじ山、万年寺10号墓などに見るように低墳丘方形墓の副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに前期の小型方墳群が列島各地に確認できることなどを考慮すると、旭・小島古墳群中の方形墓についても「方形周溝墓」とする従来の理解に対して再検討が必要である。

万年寺八幡山古墳（径43m）は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが（本庄市1986）、近年の確認調査で石棺内から鉄剣2本が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくはずれる位置にあることから、同墳には未確認の中心主体部が存在すると考えられる。埴輪を伴わず、数次の周堀調査によっても遺物を検出できていないため築造時期の詳細は不明であるが、前期に遡る可能性も考えられる（南毛古墳文化研究会2001）。南東側に隣接する万年寺つつじ山古墳とは双方の周堀が重複する関係にあるが、覆土の切り合いは確認できていない。

期中葉に属する古墳は明らかではない。当該期の児玉地域は首長墓に本庄市公卿塚古墳（径65m）、児玉町金鑽神社古墳（径68m）、同生野山將軍塚古墳（径60m）、同長沖157号墳（径32m）、美里町志渡川古墳（径40m）などの大・中型円墳の存在が目立つが、現状において旭・小島古墳群には中期の有力古墳が認められない。また、上記の諸古墳にはすでに埴輪の樹立も認められるが、旭・小島古墳群では埴輪の導入も他に遅れるようである。

中期後葉には群集墳の築造が開始され、埴輪も導入される。三空山2号墳（径43m）では、2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪に和泉後半期の土師器内斜口縁杯が共伴する。また、上前原5号墳（径26

m)でも2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪を備えることが判明しており、同時期には東群においても確実に古墳の造営が開始されている。円筒埴輪は2条突帯3段構成の小型品で、半円形の透孔をもつ。家、人物、馬などの形象埴輪は確認できない。北浦3号墳は埴輪をもたないが、出土した直立口縁をもつ土師器環は、典型的な坏蓋模倣坏出現以前の型式で、和泉期後半段階に該当し、築造時期は中期後葉に遡る(太田1990)。さらに、出土遺物がなく所属年代を確定できない小型円墳の中にも、当該期の築造と推測される事例が存在する。

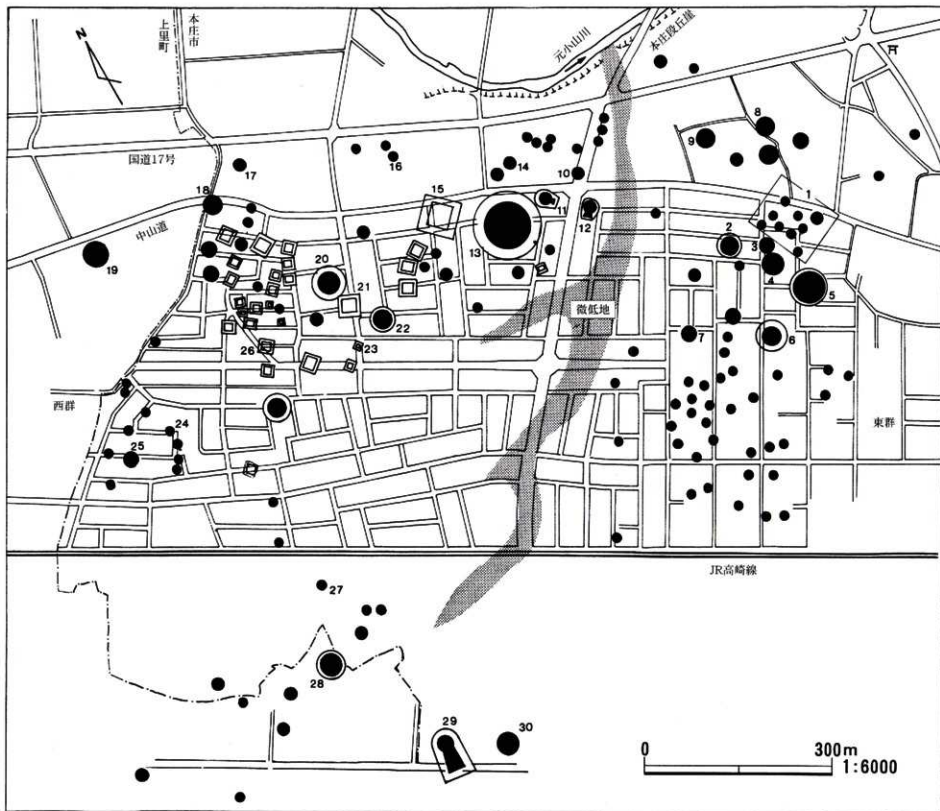
後期初頭においても群集墳の造営は継続し、三笠山8号墳(規模不詳)では円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに家、女子人物、男子武装人物、盾持人物、馬、鳥など豊富な形象埴輪が加わっている。武装人物は埼玉稲荷山古墳出土例に酷似した眉庇付冑の表現があり注目される。この後期初頭から前半にかけては三笠山7号墳(径29m)、三笠山9号墳などの帆立貝式古墳を中核とし、三笠山1・3～6号墳号墳、杉ノ根7号墳など低平な埴丘と竪穴系埋葬施設を有する小規模な円墳が多数築造され、前段階からの連続的な群集墳造営を認める。

後期後半には東群に大型円墳が集中するようになる。小島御手長山古墳(径42m)はその中で最大の規模を有し、角閃石安山岩の加工丸石を用いた横穴式石室が検出されている。副葬品に挂甲、直刀、鉄鏃、馬具などがあり、埴輪は円筒、朝顔、家、人物、大型の馬などが出土している。隣接する坊主山古墳(径36m)、山の神古墳、蛭影山古墳、前の山古墳、堂場13号墳も埋葬施設に横穴式石室を備え埴輪を樹立する古墳で、築造時期は後期のうちでもとくに末葉段階に集中すると考えられる。坊主山古墳では直刀、刀装具、鉄鏃、玉類、前の山古墳では耳環、ガラス玉が出土し、また、山の神古墳、蛭影山古墳、前の山古墳では段築、葦石の存在が確認されている。いっぽう、西群の上里町則にも神保原浅間山古墳(径30m)があり、埴輪を備え、横穴式石室からは直刀、鉄鏃、耳環、玉類のほか銅鏡が出土している。

下野堂二子山古墳は旭・小島古墳群中唯一の前方後円墳である。埴丘はすでに削平を受け段築、葦石、埋葬施設などの状況は不明であるが、航空写真、地籍図の分析から全長60m前後の規模と推定される。試掘調査では年代を示す資料が得られていないが、埴輪が確認されないことを根拠に埴輪生産停止後の築造とすれば後期末葉の時期が考えられる。

終末期古墳には、下野堂開拓1号墳(径22m)、下野堂御手長山古墳(径20m)、堂場地区に集中する堂場1～9号墳など、不整形の周堀をめぐらす直径10～20m前半の円墳が知られる。下野堂開拓1号墳(径22m)では石室攪乱層からは鉄製の金交具、刀子、釘が出土し、石室前底部から大量の土師器・須恵器片のほか青銅製の巡方3点、丸柄2点が検出されている。堂場1～9号墳では7世紀前半から後半代までの土器が共伴しており長期間の追葬が想定される。終末期の有力な古墳には方墳を採用する地域もあるが、群内での所在は現状で確認できない。

なお、三笠山古墳は直径64m、高さ3.2m、周堀幅26mを測る群内最大的大型円墳であったが、全面的な発掘調査にもかかわらず埋葬施設の所在を確認できていない。調査前の埴丘高は3m強で、埴丘径と比較してきわめて低平であったことを考えると、本来の埴丘が、後代に埋葬施設とともに削平を受けたことも想定される。しかし、埴丘、周堀からの出土遺物は皆無であり、埋葬行為自体が施行されなかった可能性も否定できない。調査では、埴丘構築土中に火山噴出物と思われる灰層の堆積を検出している。



- 1 上前原 1～3・5～11号墳
- 2 前の山古墳
- 3 蜷影山古墳
- 4 山ノ神古墳
- 5 小島御手長山古墳
- 6 坊主山古墳
- 7 堂場13号墳
- 8 小島諏訪神社古墳
- 9 本庄138号古墳
- 10 三奈山 8 号墳
- 11 三奈山 7 号墳
- 12 三奈山 9 号墳
- 13 三奈山古墳
- 14 三奈山 2 号墳
- 15 万年寺山古墳
- 16 小島北浦 3 号墳
- 17 石神境古墳
- 18 御嶽塚古墳
- 19 上里町茂間山古墳
- 20 万年寺八幡山古墳
- 21 万年寺つつじ山古墳
- 22 万年山高山古墳
- 23 林11号墓
- 24 杉ノ根 7 号墳
- 25 下野堂御手長山古墳
- 26 下野堂10号墓
- 27 山本 1 号墳
- 28 山本 5 号墳
- 29 下野堂二子塚古墳
- 30 下野堂開拓 1 号墳

図2 旭・小島古墳群分布図

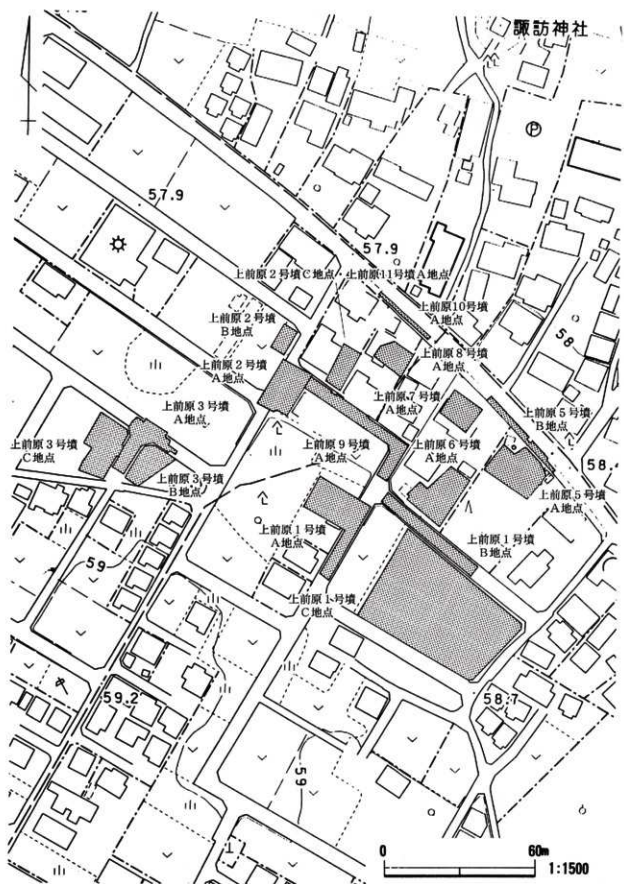


图3 調査区位置図

III 調査の成果

1 上前原1号墳

[A地点]

調査期間 平成2年3月5日～平成2年3月20日

調査面積 283㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設ならびに宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇

[B地点]

調査期間 平成3年5月22日～平成3年5月27日

調査面積 240㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

[C地点]

調査期間 平成8年9月24日～平成8年11月23日

調査面積 2,100㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺構

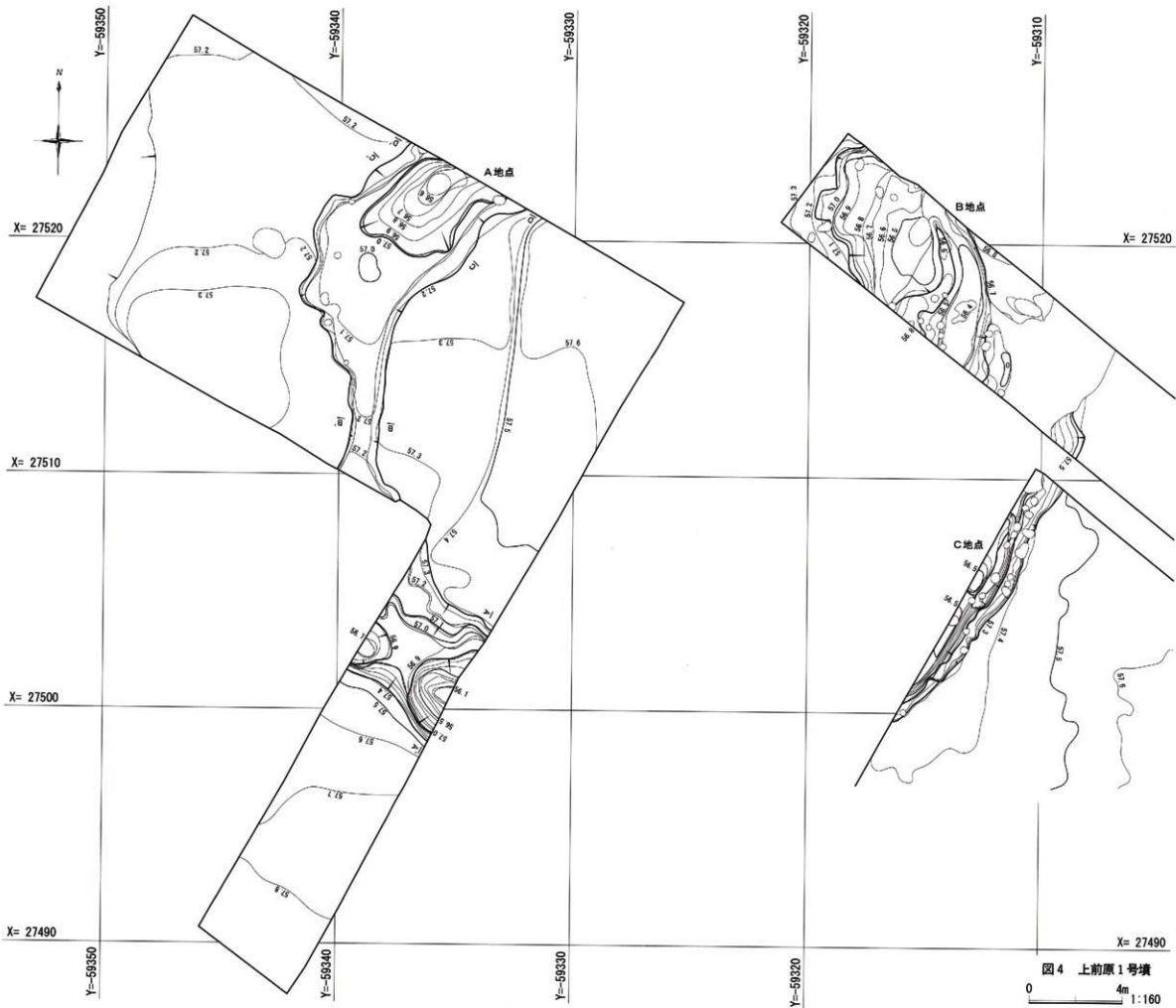
本庄市小島2丁目地内にあって、中心をX=27,510、Y=-59,330付近におく。周囲には北側に上前原9号墳、南側にやや距離をおいて御手長山古墳、西側に山の神古墳、北西側に蚕影山古墳がそれぞれ隣接する。調査区外にあるため確認できないが、北側の上前原9号墳とは、周堀の一部が重複する関係にあると考えられる。

調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。表土層は現地表から30～45cmの厚さを測る。表土直下がローム層となっており、墳丘盛土、旧表土層とも全く遺存していない。墳丘径14.0～15.0m、周堀外径31.2×34.0mを測る円墳と推定される。

墳丘部は、A地点において、南側から北西側にかけての一部が確認できた。立ち上がりは緩やかに蛇行し、西側には造出状に突出する部位が存在する。

埋葬施設の構造は不明である。A地点の調査では墳丘中心部付近まで範囲が及んだが、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の痕跡は確認できなかった。

周堀の設計は、外側立ち上がりが著しく蛇行し、整円を描かない。墳丘西側突出部位の付近では墳丘寄りに大きく湾曲し、堀幅が極端に狭くなっている。周堀底には各所に土坑状の掘り込みが認められ、ローム層下の白色粘質土にまで掘削が及んでいる。



周堀覆土は暗黄褐色土、暗褐色土、黒灰褐色土などで、上層に As-A の混入が目立つ。また、中に As-B を含む層が確認される。Hr-FA の堆積は全く認められない。

(2) 遺物

遺物は、B地点の周堀覆土から、ほぼ完形の円筒埴輪 1点が出土したほか、A地点で周堀覆土埴輪片、土師器片若干を検出した。埴輪片はいずれも円筒埴輪の細片である。土師器片は大部分が坏の破片で、細かく破断していた。

埴輪 [図6、写真14]

円筒埴輪 [1]

2条突帯3段構成で、器高32.0cm、口径23.3cmを測る。底部は右巻きで、底面に棒状の圧痕を認める。外面調整は1次タテハケのみで、底部調整はおこなっていない、内面調整はタテナデおよびナメナデで、口縁部付近にのみヨコハケを施す。口縁部は内外面ともヨコナデを施している。突帯は丁寧になでつけられ稜も明瞭である。段構成比は第1段が狭く、第3段が広い。透孔は半円形で、上弦が突帯に接している。内面第3段にヘラ状工具の先端部による線刻を認める。焼成は良好で、色調は黄橙色を呈する。

土器 [図7、写真14]

土師器坏 [1・2]

体部に丸みがあり、口縁部がわずかに内屈する。外面調整は体部をヘラケズリし、口縁部にヨコナデを加える。内面調整は体部から口縁部までヨコナデを施す。胎土に黒色粒・白色粒を含む。焼成はやや軟質で、橙色を呈する。

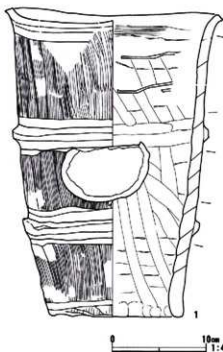


図6 上前原1号墳出土円筒埴輪実測図

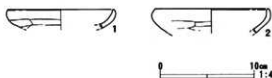


図7 上前原1号墳出土土師器実測図

上前原1号墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器坏	口径 (11.4) 底径 — 器高 —	体部丸みを持ち、口縁部やや内湾する。	外面-口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。	黒色粒・白色粒 内外一橙色	
2	土師器坏	口径 (12.1) 底径 — 器高 —	体部丸みを持ち、口縁部やや内湾する。	外面-口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。	黒色粒・白色粒 内外一橙色	

(3) 小 結

上前原1号墳では良好な状態の円筒埴輪の1点を検出したが、この資料の製作年代は典型的に5世紀末ないし6世紀初頭と推定される。いっぽう、上前原1号墳自体の築造時期は、不整形をなす周堀

の平面設計から6世紀末葉以降と考えるべきで、出土した円筒埴輪は、本来重複すると推測される上前原9号墳に樹立されていた可能性が高い。上前原1号墳に埴輪が伴わないとすれば、築造時期はさらに7世紀以降下すると考えられ、さらに埋葬施設には横穴式石室の採用を想定しうる。

なお、共伴の土師器等は真間式期に属し、年代は7世紀後半と推定されるが、追葬に伴う可能性を考慮するとこの資料の年代がただちに古墳の築造時期を示すものではない。

2 上前原2号墳・上前原11号墳

上前原2号墳

[A地点]

調査期間 平成2年3月15日～平成2年3月28日

調査面積 106㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設ならびに宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課 長谷川勇

備考 同一調査区内に蛭影山古墳(137号遺跡)の周堀を検出 [蛭影山古墳A地点]

[B地点]

調査期間 平成8年12月21日～平成9年1月12日

調査面積 70㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課 佐藤好司

[C地点]

調査期間 平成8年2月21日～平成8年2月28日

調査面積 108㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課 佐藤好司

備考 同一調査区内に上前原11号墳の周堀を検出 [上前原11号墳A地点]

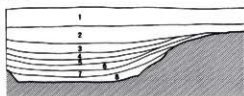
(1) 遺構

本庄市小島3丁目地内にあって、中心をX=27,580、Y=-59,350付近におく。周囲には東北東側に上前原11号墳、南側に蛭影山古墳、西側にやや距離をおいて前の山古墳がそれぞれ隣接する。

調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。表土層は現地表から25～35cmの厚さを測る。表土直下がローム層となっており、墳丘盛土、旧表土層とも全く遺存していない。墳丘立ち上がり部の遺存状態が良好ではなく確言できないが、西側に全長約3.60m、幅約6.0mの突出部を有し、墳丘径19m前後、周堀外径28m程度を測る造出付円墳と推定される。

墳丘部は、A・B地点において、南側から西側にかけての一部が確認できた。A地点では、立ち上

A57.8

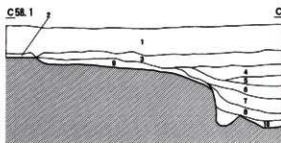


A'

B57.8



B'



C'

0 2m
1:80

上前原2号墳C地点土層説明【A-A'・B-B'】

- 1 表 土
- 2 暗灰褐色土 As-Aを含み、ザラつく。ロームブロックを若干含む
- 3 暗灰褐色土 As-B、黒色土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 As-Bを含み、ザラつく。
- 5 黒灰褐色土 As-Bを主体とし、一部は純層。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを若干含む。
- 7 暗褐色土 礫(径5~20mm)多量を含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロック、礫(径5~20mm)を含む。

上前原2号墳B地点土層説明【C-C'】

- 1 表 土
- 2 暗黄褐色土 ロームブロックを霏降り状に含む。
- 3 暗灰褐色土 As-Aを含む。
- 4 暗灰褐色土 As-Bを含み、ザラつく。ロームブロックを若干含む。
- 5 黒灰褐色土 As-Bを含み、ザラつく。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを霏降り状に含み、礫(径10~20mm)を含む。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック、礫(径10~20mm)を含む。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを含む。
- 10 灰褐色土 ロームブロックを霏降り状に含む。

図8 上前原2号墳土層断面図

がりはほぼ整円を呈する。B地点では攪乱が著しいものの、小規模な造出の存在が確認できる。

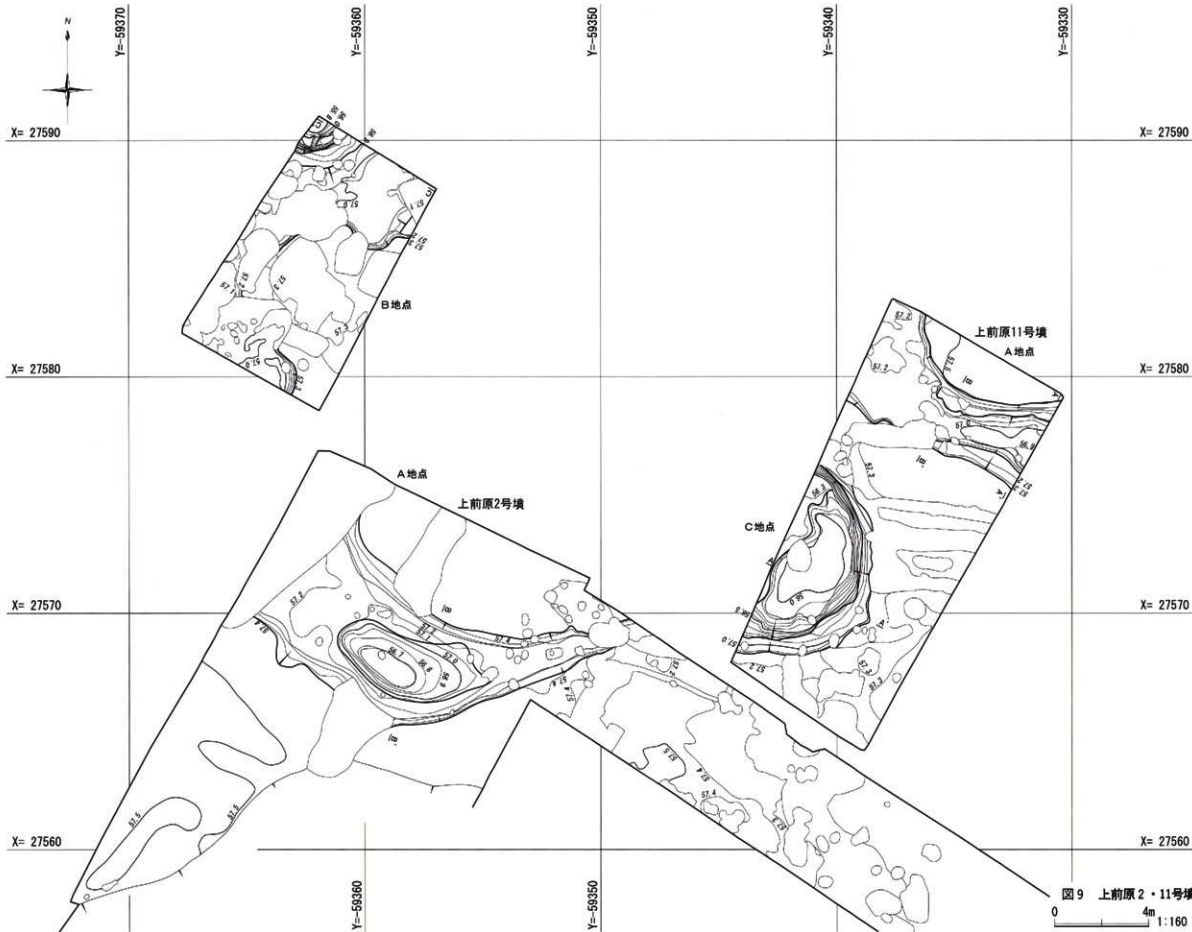
埋葬施設は古墳中心部が調査区外にあり不明である。調査範囲での所見によれば、旧表土が全面的に失われていることから、埋葬施設はすでに完全に消滅している可能性が高い。

周堀の設計は、外側立ち上がり著しく蛇行し整円を描かない。南東側は墳丘寄りに大きく湾曲し、堀幅が極端に狭くなっている。これに対し、墳丘東側にあたるC地点では、外側立ち上がりが大きく外側に張り出し、周堀底にローム下の礫層が露出するまで深く掘り込まれている。A地点の墳丘南側の周堀底やB地点の北隅も土坑状の掘り込みが認められ、掘削がローム層下の白色粘質土にまで及んでいる。

周堀覆土は暗褐色土、黒褐色土などで、上層にAs-Aの混入が目立つ。また、C地点では中位にAs-Bを含む層が確認される。Hr-FAの堆積は全く認められない

(2) 遺 物

遺物は墳丘南西側にあたるA地点の周堀覆土から土師器環1点のほか、器種不明の土師器・須恵器の小片を検出した。B・C地点での出土遺物は皆無であった。また、A地点では表土および周堀覆土からは若干量の埴輪の小片を検出したが、古墳に伴うものとは判断されなかった。



土器 [図10、写真14]

土師器環 [1]

丸底の底部から丸味をもって体部が立ち上がる。口縁部がわずかに内屈する。外面調整は体部をヘラケズリし、口縁部にヨコナデを加える。内面調整は体部から口縁部までヨコナデを施す。胎土に角閃石・白色粒を含む。焼成はやや軟質で、色調は明赤褐色を呈する。

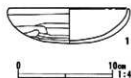


図10 上前原2号墳出土土器実測図

上前原2号墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器環	口径 12.8 底径 — 器高 3.8	丸底。体部丸みを持ち、口縁部やや内屈する。	外面-口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	

(3) 小 結

2号墳の築造時期は、不整形をなす周堀の平面设计と埴輪の樹立を認めないことから、7世紀に降下すると考えられる。埋葬施設には横穴式石室が採用されていたことが想定される。出土した土師器環は真間式期に属するやや大型の内屈口縁環で、年代は7世紀後半が考えられるが、追葬に伴う可能性を考慮すると、1号墳と同様に、この資料の年代がただちに古墳の築造時期を示すとは断定できないだろう。

上前原11号墳

[A地点]

調査期間 平成8年2月21日～平成8年2月28日

調査面積 108m²

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本市教育委員会社会教育課 佐藤好司

備考 同一調査区内に上前原2号墳の周堀を検出 [上前原2号墳C地点]

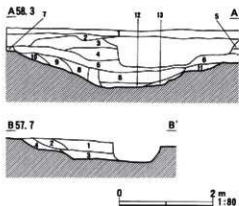
(1) 遺 構

本市小島3丁目地内において、中心をX=27,850、Y=-59,332付近におく。周囲には南西側に近接して上前原2号墳、北東側に上前原10号墳が所在する。

調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した古墳である。表土層は現地表から25～35cmの厚さを測る。表土直下がローム層となっており、墳丘盛土、旧表土層とも全く遺存していない。調査範囲が古墳南西側の一面にとどまるため全容は不明であるが、墳丘径6.0m、周堀外径11.0m程度を測る小型円墳と推定される。

墳丘部は、A・B地点において、南側から西側にかけての一部が確認できた。A地点では、立上がりはほぼ整門を呈する。

埋葬施設は古墳中心部が調査区外にあり不明である。旧表土が全般的に失われていることから、埋



上前原11号墳A地点土層説明

- 1 灰褐色土 ロームブロックを多く含む客土層。現表土。
- 2 暗灰白色土 暗灰白粘質土を多く含む。飛土塊、炭化物を含む。固くしまる。3層より明るい。
- 3 灰褐色土 As-Aを含みざらつく。砂利を含む。4層より明るい。

- 4 暗褐色土 As-Aを含む。5層より明るい。3層より暗い。
- 5 灰褐色土 As-Aを含みざらつく。ロームブロックを含む。1層より暗い。
- 6 黒灰褐色土 ロームブロックを若干含む。7層より暗い。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを均一に含む。旧表土とハードロームとの間層。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを若干含む。11層より暗い。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを含む。7層より明るい。9層より暗い。
- 10 暗褐色土 ロームブロックを含む。8層より明るい。12層より暗い。
- 11 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とし黒色土を含む。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを霏降り状に含む。7層より明るい。12層より暗い。
- 13 暗褐色土 ロームブロックを霏降り状に含む。11層より明るい。

図11 上前原11号墳土層断面図

葬施設はすでに完全に消滅している可能性が高い。

周堀の設計は、外側立ち上がり緩やかに蛇行して整円を描かない。周堀幅は南西側が狭く、西側と南側は大きく広がっている。周堀底は西側から南西側にかけてはほぼ平坦に移行するが、南側が急激に落ち込んで、調査区東端部でもっとも深くなり、堀底にはローム層下の白色粘質土が露出している。

周堀覆土は上層にAs-Aの混入が目立つ暗褐色土、灰褐色土が、下層にロームブロックを含む暗褐色土が堆積する。As-Bの堆積は明瞭には確認できない。

(2) 遺物

遺物は周堀覆土から器種不明の土師器の小片若干量を検出したほかは、中近世の陶磁器類を検出したのみで、明らかに古墳に伴う遺物は検出できなかった。

(3) 小 結

11号墳の築造時期は、不整形をなす周堀の平面設計と埴輪の樹立を認めないことから、7世紀に降下すると考えられる。埋葬施設には横穴式石室が採用されていたことが想定されるが、確定的な資料が存在せず、古墳築造時期の詳細は不明である。

3 上前原3号墳

[A地点]

調査期間 平成2年7月16日～平成2年7月21日
調査面積 264㎡
調査原因 区画整理に伴う市道建設
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

[B地点]

調査期間 平成14年2月4日～平成14年2月15日
調査面積 180㎡
調査原因 区画整理に伴う宅地造成
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕・松本完

[C地点]

調査期間 平成15年4月3日～平成15年4月8日
調査面積 360㎡
調査原因 区画整理に伴う宅地造成
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 太田博之・松本完・町田奈緒子
備考 同一調査区内に上前原14号墳の周堀を検出 [上前原14号墳B地点]

(1) 遺 構

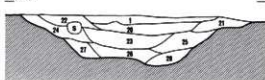
本庄市小島3丁目地内にあって、中心をX=27,540、Y=-59,420付近におく。周囲には北側に前の山古墳（上前原4号墳）、西側にやや距離をおいて上前原14号墳が所在する。

調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。A・B・C3地点の調査によりほぼ全体を確認している。墳丘径南北17.2m、東西15.4m、周堀外径20.0～21.4mを測る円墳である。

墳丘はやや南北に長く、北西側の墳丘立ち上がり部分は緩やかに蛇行している。また、南側半分は墳丘立ち上がり部分の設計が円弧を描かず、直線を連ねた多角形状になっている。B・C地点の所見では、表土層は15～20cmと薄く、直下がローム層となっており、墳丘盛土、旧表土層とも全く遺存していない。埋葬施設も完全に消滅している。

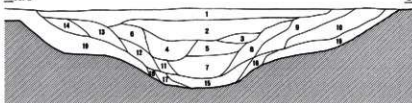
周堀の設計は、確認面のレベルで周堀西側の一端が途切れている。北から東南側にかけて、上端間2.3～3.0mの幅で推移するが、南側では一旦幅を減じ、南西側で再び大きく外側に拡張している。拡張部分の幅は最大4.1mを測る。周堀底は確認面からの深さ40～50cm程度で、東側が高く、西側へ向かって僅かに傾斜している。南西側の拡張部分の周堀底には、さらに3×2m程の不整形の掘り込みが存在する。深さ70cmを測り、底にはローム層下の礫層が露出している。なお、土層観察の結果によれば、この周堀内の不整形の掘り込みは、時期の特定はできないものの、周堀覆土がある程度堆積した後に掘り込まれたものと判断される。

A58.0



A'

C58.2



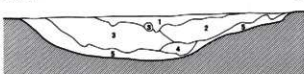
C'

上前原3号墳A地点土層説明 [A-A'-C-C']

- 1 暗褐色土 As-Aを多量に含み、ザラつく。黒色土ブロックを斑状に含む。
- 2 暗灰褐色土 As-Aを多量に含み、ザラつく。
- 3 黒褐色土 As-Aを含み、ザラつく。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 5 暗灰褐色土 As-Aを少量含み、ややザラつく。
- 6 暗褐色土 小礫(径2~5mm)、炭化物を含む。
- 7 黒褐色土 ロームブロックを霏降り状に含み、礫(径5~10mm)を若干含む。
- 8 黒褐色土 ロームブロックを霏降り状に含み、暗褐色土ブロックを斑状に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 10 暗黄褐色土
- 11 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含み、炭化物を少量含む。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを少量含み、小礫(径2~5mm)暗褐色土ブロック、炭化物を含む。
- 13 暗褐色土 ロームブロック、小礫(径2~5mm)、暗褐色土ブロック、炭化物を少量含む。

- 14 暗黄褐色土 ロームを主体とし、黒味がかかる。炭化物を少量含む。
- 15 黒褐色土 ロームブロックを霏降り状に含み、小礫(径2~10mm)、炭化物を含む。
- 16 暗褐色土 ロームブロックを霏降り状に含み、小礫(径2mm土)を多量に含む。
- 17 暗褐色土 ロームブロック、炭化物を多量に含む。
- 18 暗茶褐色土 砂質。炭化物を含む。
- 19 ローム層
- 20 暗灰褐色土 ロームブロックを含み、暗褐色土ブロックを斑状に含む。
- 21 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 22 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを含む。
- 23 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 24 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする。
- 25 暗黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 26 暗褐色土 ロームブロックを含む。21層より暗い。
- 27 暗黄褐色土 ロームブロックを含む。25層より暗い。
- 28 暗褐色土 ロームブロックを霏降り状に含む。

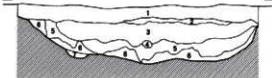
B58.3



B' 上前原3号墳B地点土層説明 [B-B']

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体として、2層を不規則に含む。小石含む。粒が粗い。
- 2 褐色土 ややよごれたローム土。
- 3 褐色土 2層を主体として、1層を不規則に含む。礫(径10mm土)を含む。
- 4 1層と2層がたたく混じる。
- 5 褐色土 4層よりローム土を多く含み、1層を不規則に含む。礫(径10mm土)を含む。多少粘質有り。

D58.2



D'

上前原3号墳C地点土層説明 [D-D']

- 1 表土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土 黒褐色土とロームの均質な混合土。
- 4 褐色土 ロームブロックによる単粒層。
- 5 暗褐色土 3層土とローム粒・ロームブロックの混合土。
- 6 褐色土 ロームを主に、黒褐色土を少量不均質に含む。
- 7 褐色土 6に近いが、黒褐色土が少ない。



図12 上前原3号墳土層断面図

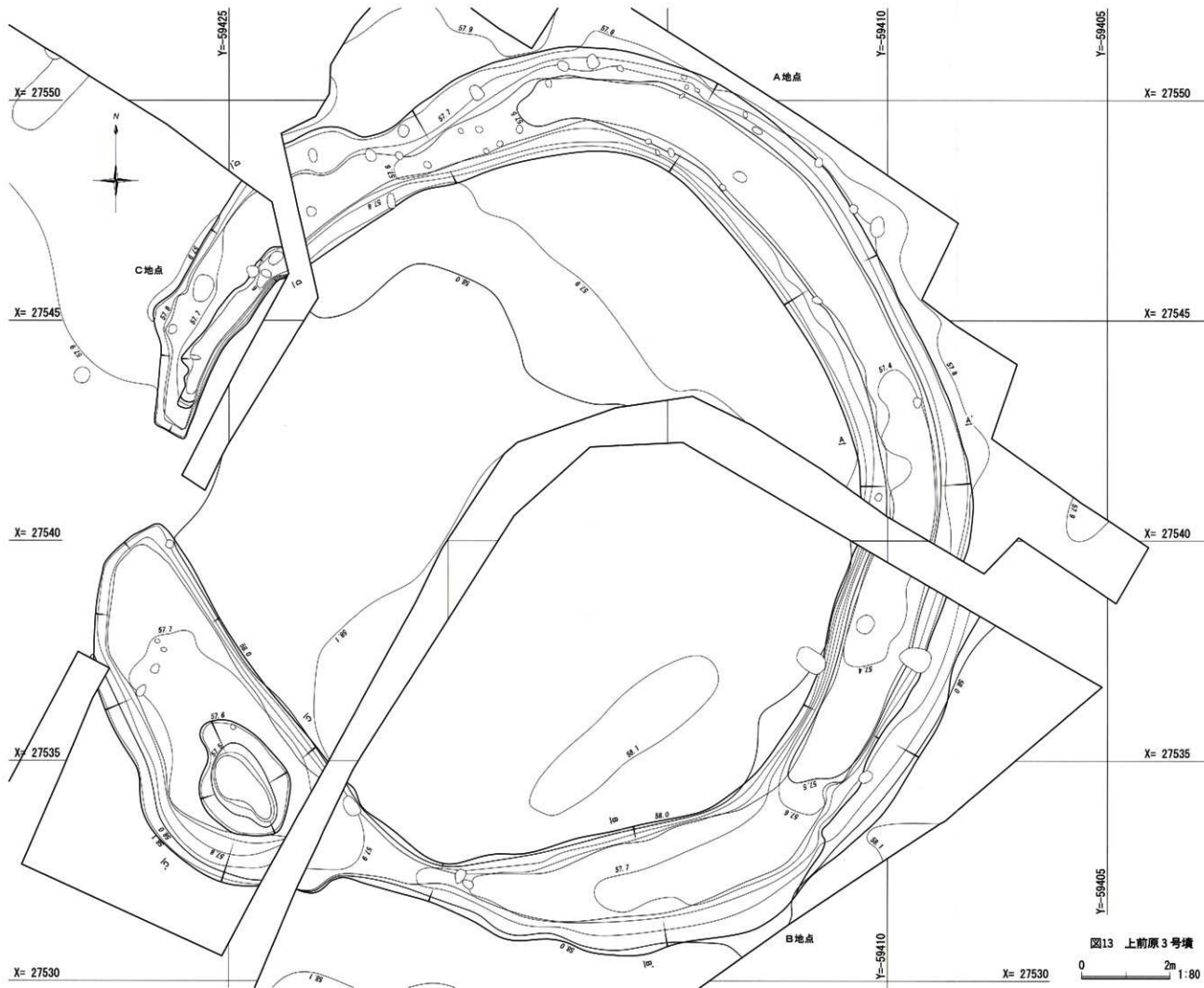


図13 上前原3号墳

周堀覆土は全体にしまりが弱く、粘性に欠ける。A地点では上層にAs-Aを多量に含む暗褐色土とロームブロック、礫を含む暗褐色土ないし暗灰褐色土が、下層にロームブロックを多量に含む暗褐色土ないし暗黄褐色土が堆積する。B・C地点では上層に黒褐色土ないし暗褐色土、下層にロームブロックを多量に含む褐色土の堆積を認める。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

(2) 遺物

遺物はB地点の南東側周堀覆土最上層で、土師器短頸壺、土師器坏各1点を検出した。いずれも破片となって、1.0×0.6mの範囲に散乱していた。埴輪は全く認められなかった。A地点では北東側から東側にかけての周堀覆土上層で、径10~15cm大の川原石の散布を認めたが、埴輪、土器その他の遺物は検出できなかった。C地点でも出土遺物は皆無であった。

土器 [図14、写真14]

土師器短頸壺 [1]

丸底の底部から体部が大きく張って立ち上がり球状を呈する。口縁部はわずかに外反して直線的に立ち上がる。外面調整は底部から体部にヘラケズリを施し、口縁部にはヨコナデを加える。内面調整は底部がナデ、体部から口縁部にかけてはヨコナデを施す。胎土にチャート・黒色粒・白色粒を含む。焼成はやや軟質で、色調は橙色を呈する。



図14 上前原3号墳出土土器実測図

土師器坏 [2]

丸底の底部から丸味をもって体部が立ち上がる。口縁部はわずかに外反して直線的に立ち上がる。外面調整は底部から体部をヘラケズリし、口縁部にはヨコナデを加える。内面調整は体部から口縁部までヨコナデを施す。

胎土に黒色粒・白色粒を含む。焼成はやや軟質で、色調は明赤褐色を呈する。

上前原3号墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器短頸壺	口径 9.0 底径 — 器高 7.9	丸底。体部膨らみ、口縁部はわずかに外反して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ。	チャート・黒色粒・白色粒 内外-橙色	
2	土師器坏	口径 11.2 底径 — 器高 3.8	丸底。口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。口縁部はわずかに外傾する。	外面-口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ。	黒色粒・白色粒 内外-橙色	

(3) 小 結

上前原3号墳B地点出土の土師器短頸壺および土師器坏の時期は7世紀前半と推定される。覆土最上層で出土していることから、この土師器の時期をただちに上前原3号墳の築造時期とすることはできない。ただし、埴輪を伴わないことから、築造時期は埴輪生産停止後、7世紀初頭以降の時期が考えられる。A地点では周堀覆土中に川原石の混入が認められた。B・C地点では出土していないものの、墳丘には葺石の存在した可能性が残る。

4 上前原5号墳

[A地点]

調査期間 平成3年8月1日～平成3年8月13日

調査面積 200㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川男・佐藤好司

[B地点]

調査期間 平成7年11月5日～平成7年11月18日

調査面積 133㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

本庄市小島3丁目地内において、中心をX=27,543、Y=-59,270付近におく。周囲には北西側にやや距離を置いて上前原7号墳、西側に近接して上前原6号墳が存在する。

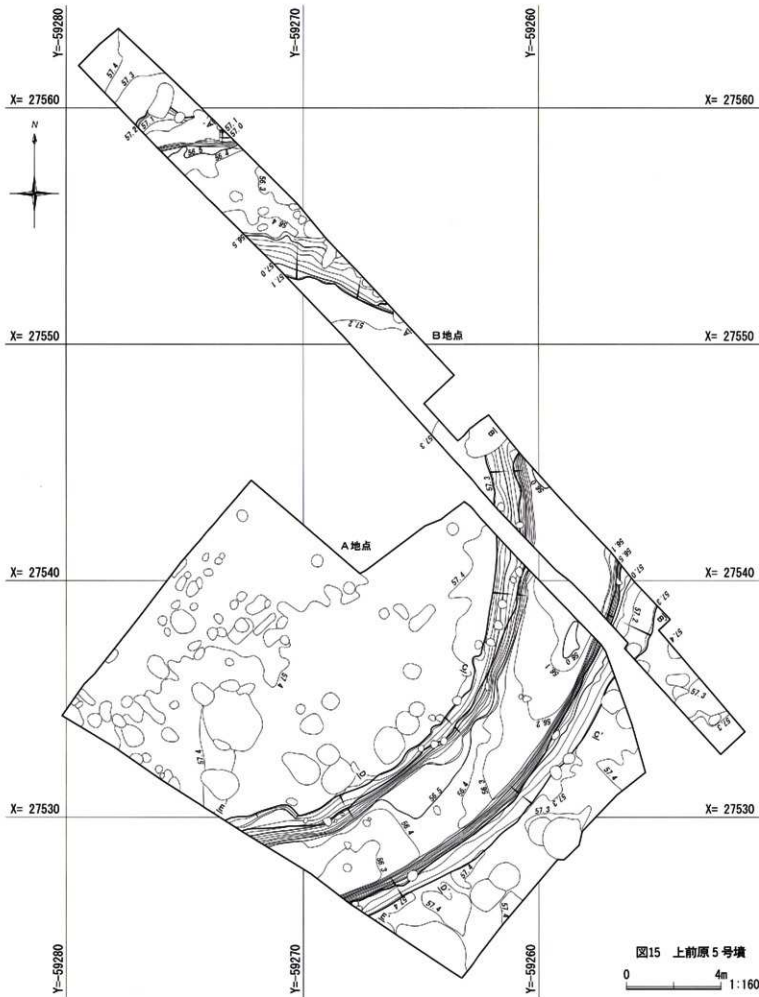
調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。A・B2地点の調査を実施し、A地点の調査で南東側の墳丘と周堀を、B地点の調査で墳丘北東端と周堀北側および東側の一部を確認している。表土は現地表から40cm前後の厚さを測る。表土の直下がローム層となっており、ローム層の上面が遺構確認面である。墳丘盛土、旧表土層とも全く遺存していない。現状で墳丘径26.0m、周堀外径34.8mを測る円墳と推定されるが、南側から西側にかけて未確認の範囲が残り、墳形はなお確定できない。

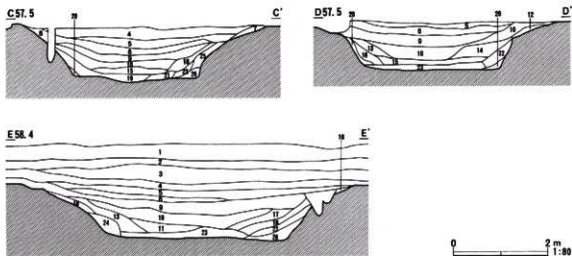
墳丘の平面設計はほぼ整円形を呈する。周堀底から墳丘側の立ち上がりは急激で、中位で稜を形成して傾斜を変換し、墳丘上位へ立ち上がっている。傾斜の変換する位置はローム層中にあり、墳丘裾部の傾斜面はローム層を削り出して形成されていたことが判る。

埋葬施設の構造は不明である。A地点の調査では墳丘中心部まで範囲が及んだが、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の痕跡は確認できなかった。

周堀の設計は、墳丘と平行してほぼ整円形を呈する。確認面での周堀上幅は、南東側で5.2m、東側から北側にかけてやや広く5.6mを測る。周堀底は平坦面を形成し、底幅は、南東側で2.8～3.0m、東側から北側にかけて3.2～3.4mを測る。周堀底のレベルは東側がもっとも高く、南北に傾斜し、南東側に比高差50cmの最深部があって、南側ではふたたび高さを増している。周堀外側の立ち上がりは、墳丘側と同様に、堀底からいったん急激に立ち上がったのち、中位で稜を形成して傾斜を変換している。

周堀覆土は、A・B両地点とも、上下2層に大別される。A地点では上層に起源不詳のパミスを含む黒褐色土ないし黒灰褐色土が堆積する。9・10層はとくに粘性が高い。下層にはロームブロックを多量に含む黒褐色土、暗褐色土、灰褐色土などが堆積する。とくに周堀底と外側立ち上がりの傾斜面に堆積する層にはロームブロックの含有率が高い。B地点では上層に黒褐色土、暗褐色土などが堆積す





上原原5号墳A地点土層説明【C-C'・D-D'・E-E'】

- | | | | |
|----------|--------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 表土 | 客土、土壌材、砂利を含む。 | 16 暗褐色土 | ロームブロックを霏降り状に含む。粘性強。 |
| 2 灰褐色土 | As-Aを多量に含みざらつく。 | 17 黒褐色土 | ロームブロックを霏降り状に含む。14層より暗い。 |
| 3 灰褐色土 | As-Aを多量に含みざらつく。 | 18 灰褐色土 | ロームブロックを含む。粘性強。 |
| 4 黒灰褐色土 | | 19 灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。粘性強。 |
| 5 黒褐色土 | | 20 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 6 黒褐色土 | 粘性強。 | 21 暗褐色土 | ロームブロックを霏降り状に含む。 |
| 7 暗褐色土 | 風化ローム土。 | 22 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。粘性強。 |
| 8 黒褐色土 | 粘性強。6層より暗い。 | 23 暗褐色土 | ロームブロックを霏降り状に含む。粘性強。16層より明るい。 |
| 9 黒灰褐色土 | 粘性強。 | 24 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。20層より明るい。 |
| 10 黒褐色土 | 粘性強。 | 25 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。24層より明るい。 |
| 11 黒褐色土 | ロームブロックを霏降り状に含む。 | 26 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。25層より明るい。粘性強。 |
| 12 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | | |
| 13 灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。粘性強。 | | |
| 14 黒褐色土 | ロームブロックを霏降り状に含む。10層より暗い。 | | |
| 15 黒褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | | |

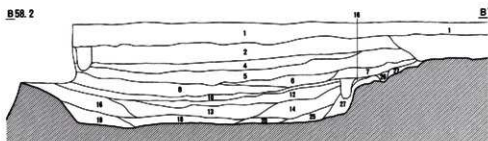
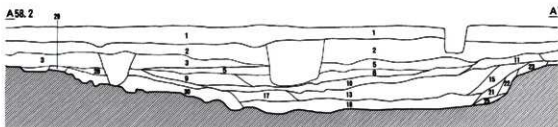
図16 上原原5号墳土層断面図(1)

る。10層はとくに起源不詳のパミスを含み、粘性が高く、A地点の9・10層に対応すると考えられる。下層にロームブロックを多量に含む暗褐色土、灰褐色土などの堆積を認める。A・B両地点の8～10層に含まれる起源不詳のパミスはAs-Bの可能性が考えられるが、同定作業を経ていない。Hr-FAの堆積は確認できていない。

(2) 遺物

遺物は、A地点北半およびB地点の周堀覆土から、多量の円筒埴輪・朝顔形埴輪を出土した。A地点南半でも埴輪片を検出しているが、出土量は少ない。出土状態は、とくにB地点で埴丘寄りに集中する傾向が強く、埴丘裾部の樹立原位置から周堀内に転落した状況を示している。出土層位はA地点では9層、B地点では10・12層に集中している。いずれも周堀底から20～30cmほど上位にあり、古墳築造後、一定の時間が経過してから転落したことが判る。なお、形象埴輪はA・B両地点ともまったく出土していない。

土器はA地点の埴丘南側の周堀覆土から土師器埴1点を検出した。



上前原5号墳B地点土層説明【A-A'・B-B'】

1 表 土

2 灰褐色土 As-A、ロームブロックを含む。

3 灰褐色土 As-Aを含み、ロームブロックを若干含む。

4 暗灰褐色土 As-A多量に含み、ざらつく。ロームブロックを含む。

5 暗灰褐色土

6 灰褐色土 暗褐色土ブロックを含む。

7 灰褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。

8 黒灰褐色土 粘性強。

9 暗褐色土 粘性強。

10 黒褐色土 粘性強。

11 暗灰褐色土 ロームブロックを若干含む。

12 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。

13 灰褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。

14 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。

15 灰褐色土 ロームブロックを含む。

16 暗褐色土 ロームブロックを含む。

17 暗褐色土 ロームブロックを含む。16層より明るい。

18 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。14層より明るい。

19 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。18層より明るい。

20 暗褐色土 ロームブロックを主体とする。

21 暗褐色土 ロームブロックを含む。17層より明るい。

22 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。19層より明るい。

23 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。22層より明るい。

24 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。23層より明るい。

25 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。24層より明るい。

26 暗灰褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。

27 暗褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土が混入する。

28 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。25層より明るい。

29 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。28層より明るい。

30 暗褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土が混入する。27層より明るい。

図17 上前原5号墳土層断面図(2)

埴輪 [図18～28、写真14～20]

円筒埴輪 [1～46]

1～8は全形の確認できる資料で、すべて2条突帯3段構成である。器形は緩やかに開く逆台形を呈する。器高31.7～36.7cm、底径12.5～13.9cm、口径21.0～24.3cmを測る。底部は確認の範囲ですべて右巻きである。底面には棒状の圧痕が目立つ。

外面調整は1次調整にタテハケ、2次調整にヨコハケを用いる。2次調整は摩耗等により止め痕を明瞭に観察できない個体もあるが、止め痕を確認できるものは、すべてBc種ヨコハケである。2次調整の施し方は、第2・3段がより丁寧であるのに対し、第1段はやや粗雑になる傾向を認める。第1

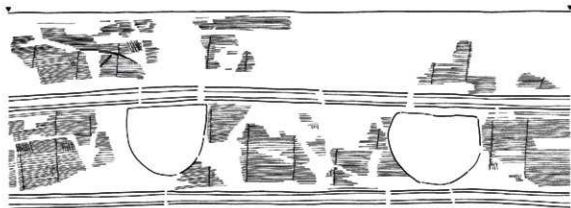
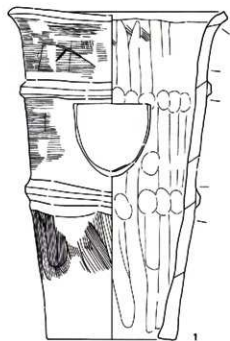
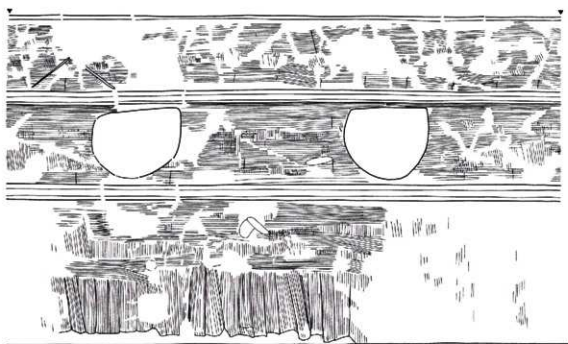
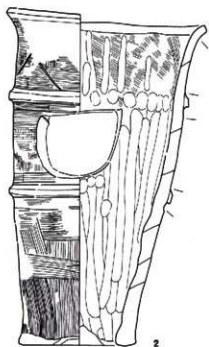


图18 上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(1)



0 10cm 1:4

图19 上前原5号填出土円筒埴輪実測図(2)

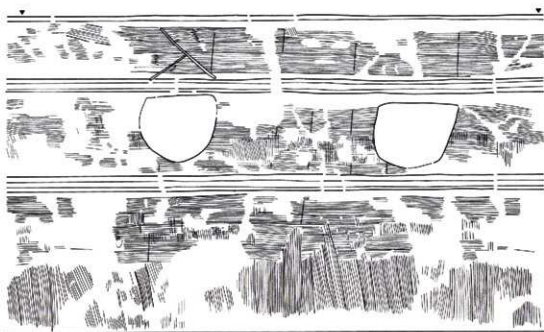
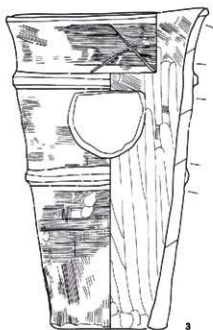


图20 上前原5号墳出土土甕輪軸実測图(3)

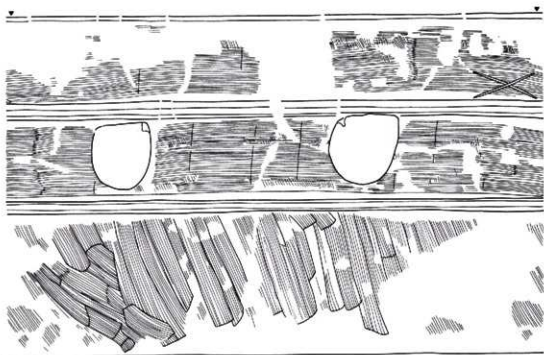
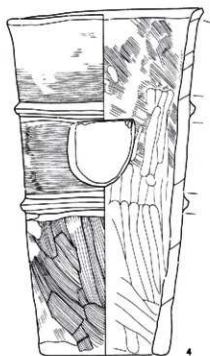


图21 上前原5号墳出土円筒植輪実測図(4)

0 10cm
1:4

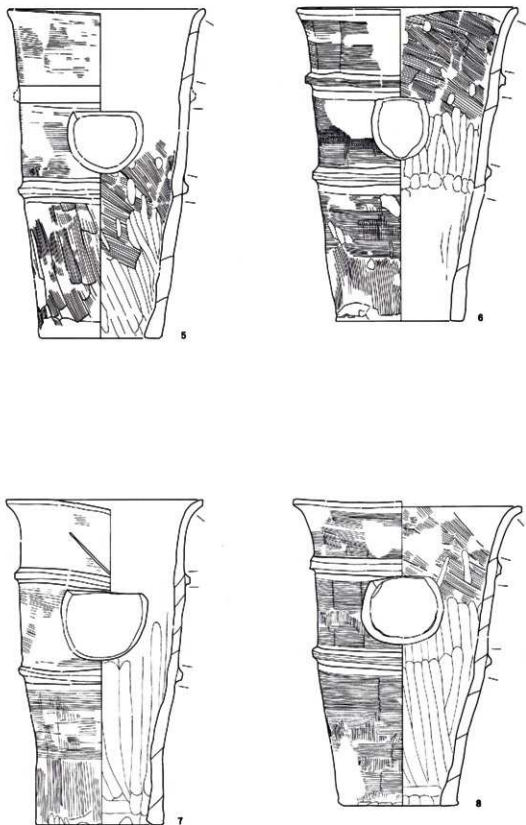


图22 上前原5号出土土円筒埴輪実測図5)

0 10mm
1:4

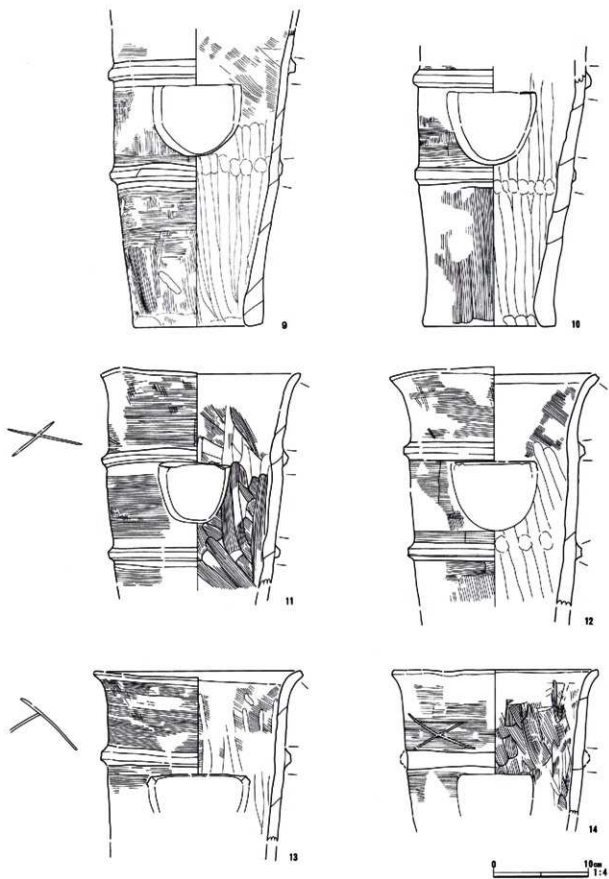


图23 上前原5号墳出土円筒埴輪実測図(6)

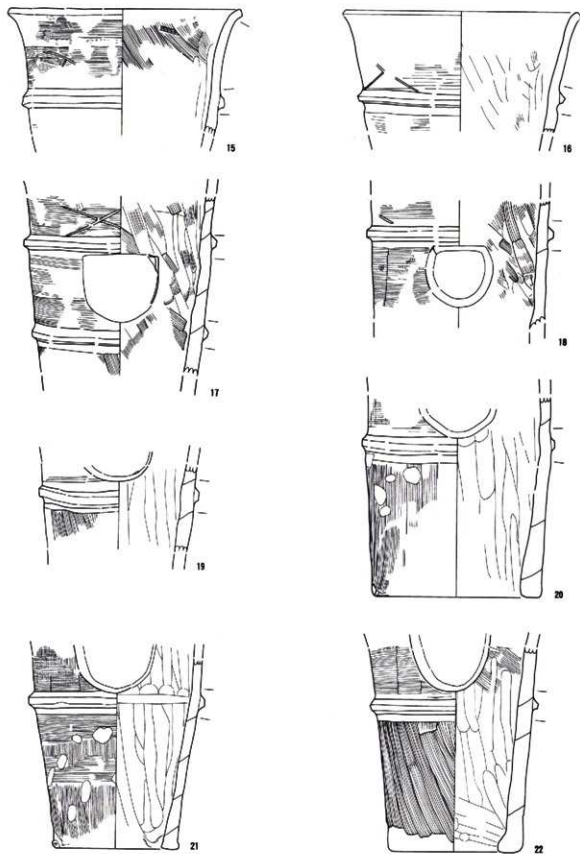


图24 上前原5号墳出土円筒埴輪実測(図7)

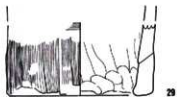
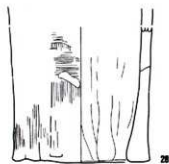
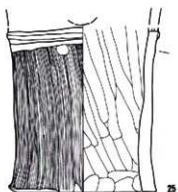
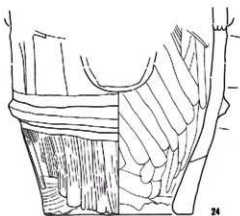
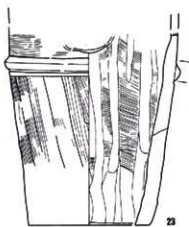


图25 上前原5号墳出土円筒輪軸実測図(8)

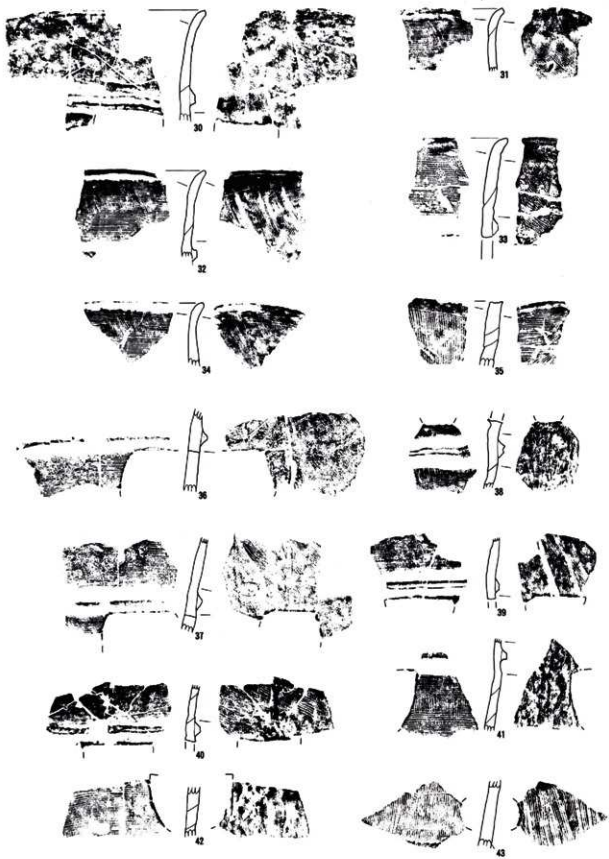


图26 上前原5号墳出土土甎罐輪拓影(1)



図27 上前原5号墳出土円筒埴輪拓影(図2)

段の2次調整は、8のように基部までの範囲に施す個体と、2・3・6・7など上半部だけに施す個体とがある。また、1・4・5など第1段への2次調整をまったく欠く個体も複数存在する。底部調整を施す個体は皆無である。

内面調整は下段にタテナダ、上段ナナメハケを施す。ナナメハケを加える範囲は個体により異なり一定ではない。第1段の中位以上に施す個体〔5〕、第2段以上に施す個体〔3・4〕、第3段のみに施す個体〔2〕、ナナメハケをほとんど認めない個体〔1〕などがある。突帯部分の内面に連続する指頭圧痕が残る個体〔1・2・6など〕も見える。

突帯は丁寧にナダつけられている。突出度が比較的高く、断面が台形を呈し、端面上下の稜も明瞭である。突帯が剝離した状態の個体が複数あるが、剝離面の観察からは、突帯割り付け線の存在を確認できない。

段構成比は第1段幅が広く、第3段幅はやや狭い。

透孔は第2段に1対が配置される。形態はすべて半円形である。ヘラ状工具を用い、段中の上方に寄せて大きく穿ち、上辺は突帯に接近している。

線刻は「×」、∩、∪などがあり、出現率が高い。位置はいずれも第3段の外面にあって、ヘラ状工具の先端部を器面に立てて、細く深めに刻み込んでいる。第2段に存在する透孔との位置関係は、①透孔の直上に配置する個体、②透孔の斜め左上に配する個体、③90°ずれた位置に刻む個体の三通りがある。

胎土には片岩、海面骨針の含有が目立つ。焼成は総じて良好で、堅緻な焼き上がりである。部分的に還元気味の焼成となっている個体が少数存在する。色調は明褐色ないし橙色からいぶい黄褐色を呈する。還元気味焼成の部分は黄灰色を示す。黒斑を認める個体は存在しない。

なお、24は資料中で特異な個体である。他に比べ、第1段幅が狭く、径の大きな底部から第1段が開き気味に立ち上がり、第1突帯で内側に屈曲し、第2段はほぼ直立している。第2段の外面に2次調整を欠き、基部外面に作業台の木目圧痕が残る。

朝顔形埴輪〔47～49〕

47は口縁の一部を除き、ほぼ全形の知れる資料である。底面に棒状の圧痕を認める。胴部は2条突帯3段構成で、わずかに開き気味に立ち上がる。

外面調整は胴部が1次調整にタテナダ、2次調整にヨコハケを用いている。2次調整はB種ヨコハケで、第1段は中位以上、第2・3段には全面に施している。胴部第1・2段の2次調整はやや粗雑で、中間に欠落があり、止め痕も明瞭ではない。これに対して、胴部第3段の2次調整は丁寧に、段

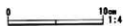
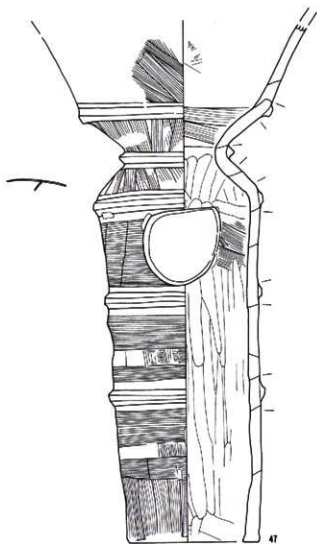


图28 上前原5号墳出土朝顔形埴輪実測図・拓影図

間全面を覆い、止め痕も明瞭である。止め痕の間隔は3.0~4.5cmとピッチが短く、やや右側に傾斜する。肩部以上は1次調整のみで、肩部、口縁部下段にはタテハケ、口縁部上段にはナナメハケを施している。

内面調整は、胴部第1段から第3段までがタテナデで、第3段の一部にナナメハケを施す。肩部はタテナデ、口縁部はナナメハケである。

突帯はいずれも丁寧にナデ付けられ稜も明瞭である。

胴部の段構成比は、円筒埴輪と同様で、第2・3段幅に比べ、第1段幅が広い。第2・3段幅はほぼ均等である。

透孔は、第2・3段に、相互に90°ずれて、1対づつを穿つ。第2段の透孔はやや横長の円形で、段中の上位に穿孔し、上端は第2突帯下側のナデを切って穿っている。第3段の透孔は半円形で、第2段の透孔よりも大きく、ほとんど段間いっぱい穿っている。上端が第3突帯の下側のナデを切り、第3突帯の下縁に接する位置にある。

線刻が肩部外面に存在する。ヘラ状工具の先端部を器面に立てて、細く深めに刻み込んでいる。透孔とは、90°ずれた位置関係にある。

48・49とともに口縁部の破片である。

胎土に片岩、海綿骨針を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。円筒埴輪と同じく、黒斑を認める個体は存在しない。

土器 [図29、写真20]

土師器埴 [1]

口縁部の大半を失っている。丸底の底部から胴部が大きく横に膨らんで立ち上がる。胴部は偏平球状を呈し、中位に最大径を持ち、上位は大きく屈曲し、膨らんだ肩部を経て頸部に至る。口縁部は外反して直線的に立ち上がる。

外面調整は底部周辺がヘラケズリのちナデ、胴部中位が横方向のヘラミガキで、肩部には細かな放射状のハケを施す。内面調整は全面にナデを施す。

胎土に片岩・海綿骨針・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

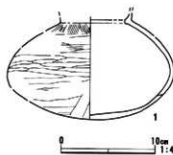


図29 上前原5号墳出土土器実測図

上前原5号墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器埴	口径 底径 器高	丸底。扁平に膨らむ体部。 最大径17.7cm。	外面-体部横位ヘラミガキ、底部ヘラケズリ後ナデ。内面-ナデ。	片岩・海綿骨針・赤褐色粒 内外-橙色	

(3) 小 結

上前原5号墳出土の円筒埴輪は、外面2次調整にB種ヨコハケを多用し、黒斑を認めないことから川西IV式に該当する。川西IV式の円筒埴輪は、本庄市旭・小島古墳群三笠山2号墳、見玉町生野山14号墳で出土し、前者では土師器坏蓋模倣坏を認めず、体部の深い和泉式期後半段階の土師器内斜口縁

坏が伴い、後者でも TK-208段階の須恵器、和泉式期後半段階の土師器壺、高坏が出土している。いっぽう、本庄市東五十子古墳群、同西五十子古墳群などに見られるように、典型的な土師器坏蓋模倣坏をはじめとする鬼高Ⅰ式期の土師器に TK-23・47段階の須恵器が共存する段階の円筒埴輪には、外面2次調整をまったく認めない。このことから、上前原5号墳の築造時期は、土師器和泉式期後半段階、須恵器 TK-208段階、前方後円墳畿内編年7期に該当し、実年代は5世紀後半と推定される。

円筒埴輪の外面2次調整に用いている技法はすべて Bc 種ヨコハケである。見玉地域では前方後円墳畿内編年7期に外面2次調整を伴う円筒埴輪を樹立する古墳が10数基存在するが、C種ヨコハケの可能性が指摘されている伝岡部町伊奈利塚出土品を除き、本庄市東小学校1号墳、同2号墳、見玉町生野山9号墳、同長沖14号墳、美里町熊谷後5号墳など詳細の判明する出土例ではことごとく Bc 種ヨコハケを用いている。

前方後円墳畿内編年7期は、また見玉地域における古式群集墳の形成開始時期にあたることから、古式群集墳の形成を契機として埴輪生産体制の整備が図られ、その過程で円筒埴輪の外面2次調整技法として主体的に Bc 種ヨコハケが導入されているようである。

A地点調査区では調査範囲が上前原5号墳の墳丘中心付近にまで及んだものの、埋葬施設は痕跡をとどめなかった。周堀覆土においても、石材その他埋葬施設の型式を伺わせる遺物は検出していない。ただ、築造時期を考慮すると、上前原5号墳の埋葬施設には木棺直葬、箱式石棺などの竪穴系が採用されたものとの推測される。

火山噴出物との関係では、上前原5号墳の築造時期は、確実に Hr-FA 降下以前に遡ると考えるが、周堀内への堆積は確認できない。自然科学的な同定は行っていないものの、A・B両地点の8～10層に含まれるパミスは粒径の大きさから As-B の可能性が高く、土層断面図でも明白のように、上前原5号墳の周堀は、この段階において完全に埋没しているわけではないことから、未調査の範囲に Hr-FA が堆積していることも考えられる。

5 上前原6号墳

[A地点]

調査期間 平成4年6月1日～平成4年6月6日

調査面積 200㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

本庄市小島2丁目地内にあって、中心をX=27,547、Y=-59,300付近におく。周囲には東側に上前原5号墳、西側に上前原9号墳が隣接し、北側にやや距離をおいて上前原7号墳が所在する。

調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。表土層は現地表から90cm前後の厚さを測る。調査範囲が墳丘と周堀の一部にかかるのみで詳細は不明であるが、表土直下がローム層となっており、墳丘盛土、旧表土層とも全く遺存していない。墳丘径15m、周堀外径19mを測る円墳と推定される。

墳丘部は、調査区の北隅に南東側の一部が確認できた。立ち上がりは明瞭で、上端の一部に大きな攪乱が入るものの、平面設計はほぼ整円形を呈することが確認できる。西側には造出状に突出する部位が存在する。

埋葬施設の構造は不明である。墳丘端部では、墳丘盛土と旧表土層を失い、表土が直接ローム層を被覆することから、埋葬施設はすでに消滅している可能性が高い。

周堀の設計は、南東側では墳丘と平行してほぼ整円形を呈するが、南西側では外側に大きく張り出しすものと推測される。確認面での周堀上幅は、南東側で2.0～2.2mを測り、東側から南側にかけて、やや幅を増している。立ち上がりの傾斜は内外とも強く、横断面が逆台形を呈し、堀幅の割に堀底までが深い。確認面からの深さ110cmを測る。周堀底は平坦面を形成し、レベルはほぼ一定している。底幅は40～50cmを測る。

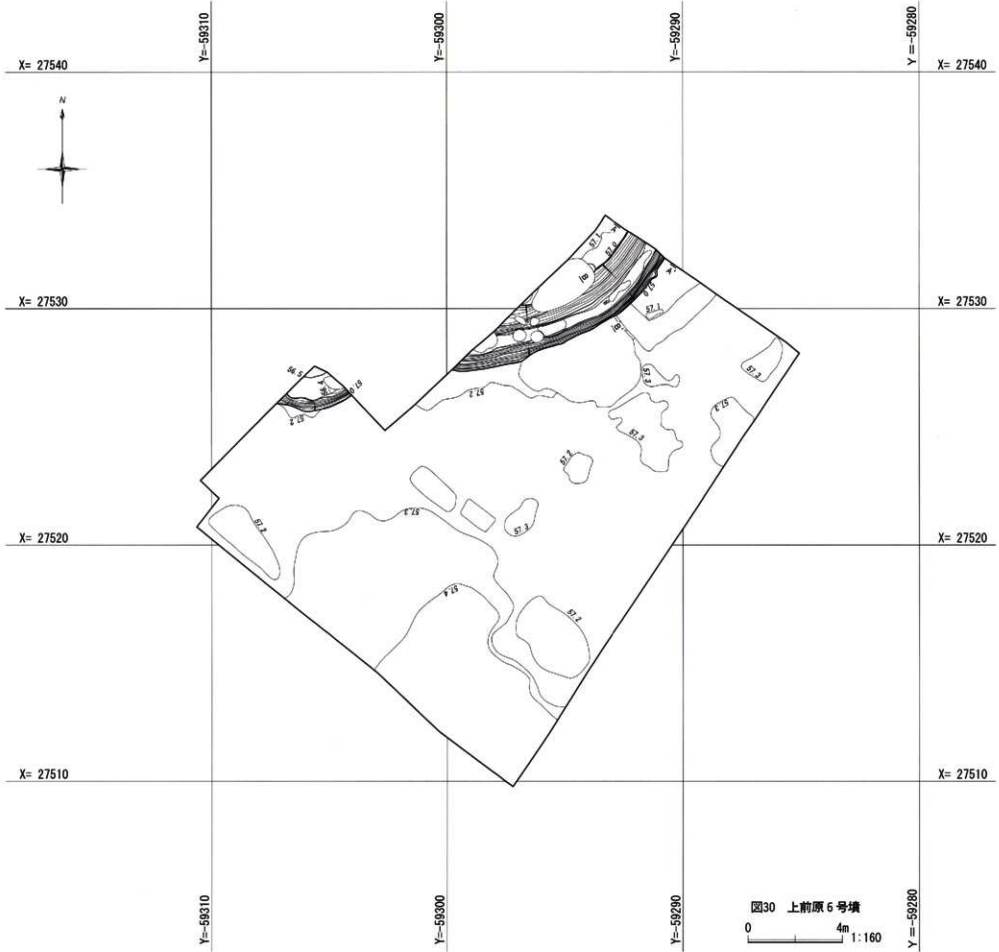
周堀覆土は2層に大別され、上層にロームブロックを多量に含む黒灰褐色土および暗褐色土、下層にロームブロックを多量に含む暗黄褐色土の堆積を認める。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。表土にはAs-Aの混入が目立つ。

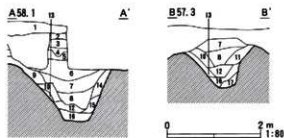
(2) 遺 物

遺物は表土および周堀覆土の上層から器種不明の土師器・須恵器の小片若干量を検出したほかは、表土から近世の陶磁器類を少量検出したのみで、明らかに古墳に伴う遺物は検出できなかった。

(3) 小 結

上前原6号墳は調査範囲が一部にとどまり、確実に伴出する遺物も皆無であった。築造時期を確定する手掛かりはほとんどないが、埴輪を伴わないと考えられること、周堀の一部が外側に張り出し平面設計が整円形を呈さないと推測されることなどから、7世紀以降の可能性が考えられる。





上前原6号墳土層説明

- 1 表 土
- 2 暗灰褐色土 As-Aを含む。
- 3 灰褐色土 As-Aを含み、ざらつく。ロームブロックを若干含む。
- 4 灰褐色土 As-Aを含み、ざらつく。ロームブロック、焼土ブロックを若干含む。
- 5 暗灰褐色土 As-Aを含む。ロームブロックを若干含む。
- 6 黒灰褐色土 ロームブロックを若干含む。
- 7 黒灰褐色土 ロームブロックを若干含む。6層より暗い。

- 8 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。8層より明るい。
- 10 暗褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。9層より明るい。
- 11 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。10層より明るい。
- 12 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 13 暗黄褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。全体的に黄味が強い。
- 14 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。11層より明るい。
- 15 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。12層より明るい。
- 16 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。15層より明るい。
- 17 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。16層より明るい。

図31 上前原6号墳土層断面図

6 上前原7号墳

[A地点]

調査期間 平成4年6月1日～平成4年6月6日

調査面積 140㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

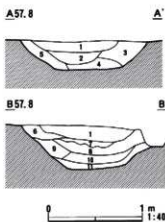
本庄市小島2丁目地内にあって、中心をX-27,560、Y--59,300付近におく。周囲にはやや距離をおいて南東側に上前原5号墳、南側に上前原6号墳が存在する。

調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。表土層は現地表から30cm前後の厚さを測る。調査範囲は古墳の東側1/4程度に及んだ。表土直下がローム層となっており、調査の範囲には、墳丘盛土、旧表土層とも全く遺存していない。墳丘径14m、周堀外径16m前後を測る円墳と推定されたが、西側3/4ほどが未調査の範囲として残り、墳形はなお確定できない。

墳丘の平面設計はほぼ整円形を呈する。周堀からはほぼ直線的に立ち上がり、中間の傾斜変換線、ローム層削り出しによる墳丘裾部テラスの存在は認められない。

埋葬施設の構造は不明である。調査範囲は墳丘中心付近にまで及んだが、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の痕跡は確認できなかった。

周堀の設計は、墳丘と平行してほぼ整円形を呈する。確認面での周堀上幅は1.5m、東側から北側にかけてやや広く1.6mを測る。周堀底は平面をなし、底幅は南東側で0.5m、東側から北側にかけてや



上前原7号墳土層説明

- 1 暗灰褐色土 ロームブロックを若干含む。
- 2 暗灰褐色土 ロームブロックを密降り状に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを密降り状に含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを密降り状に含む。4層より暗い。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 明灰白色土 Hr-FAブロックを多量に含む。
- 8 黒灰褐色土 ロームブロックを若干含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを含む。3層より明るい。
- 10 暗灰褐色土 ロームブロックを含む。8層より明るい。
- 11 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。9層より明るい。

図32 上前原7号墳土層断面図

や広く0.9mを測る。周堀底のレベルはほぼ平坦であるが、東側に1箇所段差が存在する。周堀外側の立ち上がりは、墳丘側と同様に、ほぼ直線的に立ち上がる。

周堀覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土および暗灰褐色土で、B-B'の第7層に Hr-FA ブロックを多量に含んでいる。

(2) 遺物

遺物は、周堀覆土および表土層から埴輪片、土器片を少量検出した。埴輪片は円筒埴輪を中心に若干の形象埴輪を含む。土師器片は須恵器甕の破片が少量で、他に須恵器瓶、土師器環の細片を含んでいる。

埴輪 [図34・35、写真21・22]

円筒埴輪 [1～19]

いずれも破片で、全形の確認できる資料は存在しない。想定される直径から、すべて2条突帯3段構成品の破片と推測される。器形は緩やかに開く逆台形を呈する。

基底部の巻き方は、15で右巻きを認める。底面に作業台の木目圧痕が残る。

外面調整は多くが1次タテハケのみであるが、3・4には2次調整を認める。2次調整はB種ヨコハケで、3・4ともに1箇所づつ縦方向の静止痕を確認できる。ハケメ工具の幅、調整のストロークは不明である。12～19は基部の破片であるが、底部調整を施す個体は皆無である。

内面調整はタテハケ、ナナメハケ、タテナデ、ナナメナデがある。おおよそ下位にナデ、上位にハケを施す傾向にあるが、個体により必ずしもこの限りではない。

突帯は丁寧にナデ付けられている。断面は台形を呈し、稜も比較的明瞭である。一部に突帯剝離面を観察できる個体があるが、割り付け線の存在は確認できない。

透孔は6に円形の、7にやや横長の円形透孔が存在するほか、3にも形状不詳の透孔を認める。穿孔にヘラ状工具を用い、6・7では段の中央に、3では突帯直下に配置している。透孔相互の位置関係が判明する資料はない。

線刻は「×」が2の最上段に、「×」の一部と考えられるものが、10に見られる。もとに外面にあって、ヘラ状工具の先端部を器面に立てて、深めに刻み込んでいる。

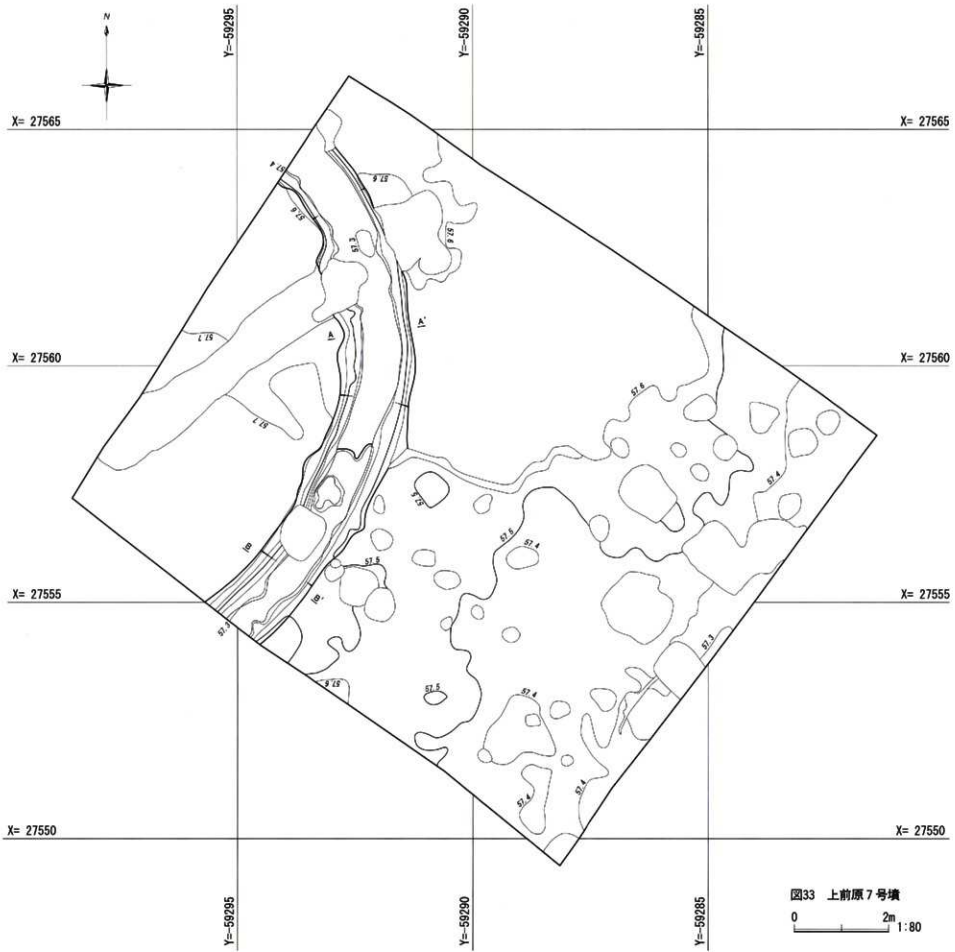


図33 上前原7号墳
0 2m 1:80

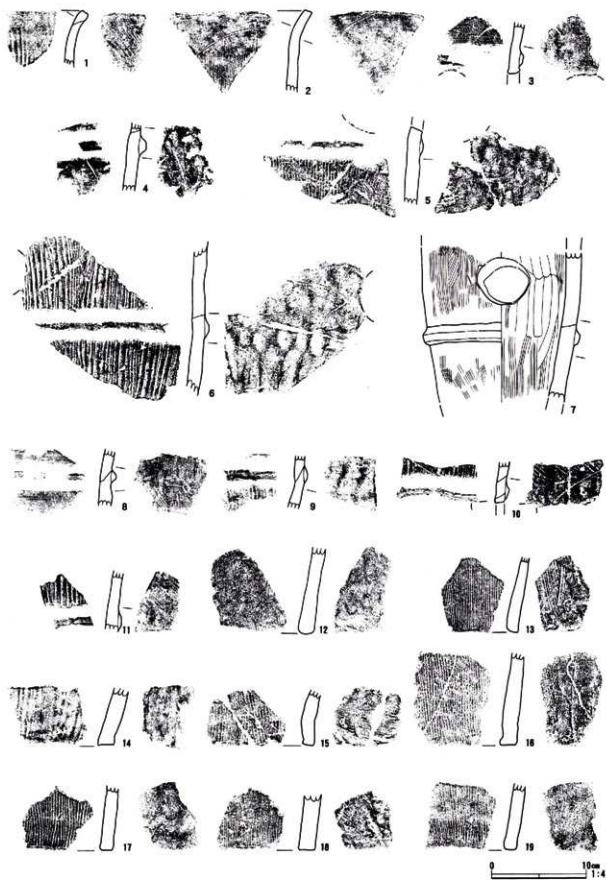


图34 上前原7号出土土円筒埴輪軸突測図・拓影図

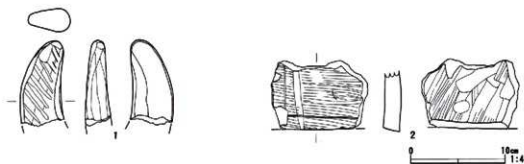


図35 上前原7号墳出土土象埴輪実測図

胎土には片岩、海面骨針の含有が目立つ。焼成は総じて良好で、2・6・8・11・14はとくに堅緻な焼き上がりである。このうち8は還元焼成で、14も内面の一部が還元気味に焼き上がっている。

色調は橙色、明赤褐色が多く、にぶい黄褐色を示す個体も一定量を占める。還元焼成による個体は灰黄褐色を呈する。黒斑を認める個体は存在しない。

形象埴輪 [1・2]

器種不明 [1・2]

1は中実成形で、先端の丸い半三日月形を呈する。調整は全面ナデで片面に粗い木目圧痕を残す。胎土に片岩を含む。焼成は良好で、明赤褐色を呈し、一部に赤色塗彩が残る。

2は厚手の板状の破片で、横方向にわずかに湾曲し、下縁は斜めの面をなしている。外面調整は断続的なヨコハケ、内面調整はナメハケのち一部にナメナデを加えている。下縁に平行して1条の線刻がある。胎土に片岩を含み、焼成は良好で、橙色を呈する。

土器 [図36、写真22]

須恵器小型甕 [1～4]

1は口縁部の破片である。外反して立ち上がり、口唇部の内側が直立して尖り、直下に凹線がめぐる。外面に緩やかな櫛描波状文が入る。内面にはヨコナデを施す。胎土に白色粒、チャートを含む。焼成は良好できわめて堅緻に焼き上がっている。色調は黒灰色を呈する。

2～4は胴部の破片である。外面に平行タキを施し、内面には同心円状の当具痕が残る。胎土に赤褐色粒、白色粒、チャートを含む。焼成は良好できわめて堅緻に焼き上がっている。色調は表面が黒灰色ないし暗灰色を呈するが、断面は赤褐色で、3・4は断面中央が黒く、いわゆるサンドイッチ状の焼成を示す。

須恵器提瓶 [5]

胴部の破片である。外面に同心円状のカキメを施し、内面調整はナデを加えている。胎土に黒色粒、白色粒、チャートを含む。焼成は良好で、色調は内外面とも灰黄色を呈する。

(3) 小 結

上前原7号墳の円筒埴輪は、外面2次調整にB種ヨコハケを用い、還元焼成による川西IV式に該当する資料を含んでいる。上前原5号墳に比べ、外面2次調整の出現率は低いが、古墳の築造時期は上

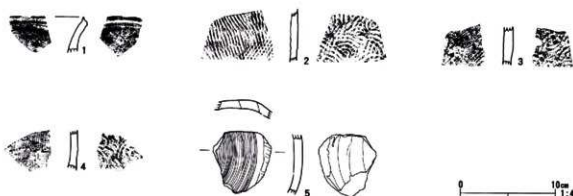


図36 上前原7号墳出土土器実測図・拓影図

上前原7号墳出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 (甕)	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部外反。口唇部内側尖る。	外面—口縁部に櫛揃き波状文。 内面—口縁部ヨコナデ。	チャート・白色粒 内外—灰色	
2	須恵器 (甕)	口径 — 底径 — 器高 —	胴部小片。	外面—平行敲き。 内面—同心円状当具痕。	赤褐色粒・白色粒 内外—灰色	
3	須恵器 (甕)	口径 — 底径 — 器高 —	胴部小片。	外面—平行敲き。 内面—同心円状当具痕。	チャート・白色粒 内外—灰色	断面サンドイッチ状。
4	須恵器 (甕)	口径 — 底径 — 器高 —	胴部小片。	外面—平行敲き。 内面—同心円状当具痕。	白色粒 内外—灰色	断面サンドイッチ状。
5	須恵器 (瓶)	口径 — 底径 — 器高 —	胴部小片。	外面—カキ目。 内面—ナデ。	チャート・白色粒 黒色粒 内外—灰黄色	

前原5号墳と同じく、土師器和泉式期後半段階、須恵器 TK-208段階、前方後円墳畿内編年7期に該当し、実年代は5世紀後半と推定される。このことは、周堀内に堀底と間層を挟んで Hr-FA の堆積が確認できることと矛盾しない。

埋葬施設は痕跡をとどめなかったが、古墳の築造時期を考慮すると、木棺直葬、箱式石棺など竪穴系の施設が採用された可能性が高い。

須恵器小型甕、須恵器提瓶は小片で、周辺からの混入と考えられる。

7 上前原8号墳

[A地点]

調査期間 平成6年10月1日～平成6年10月15日

調査面積 120㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺構

本庄市小島2丁目地内にある。周囲には西側に上前原11号墳、北側に上前原10号墳、やや距離をおいて南東側に上前原7号墳が存在する。調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。表土層は現地表から30cm前後の厚さを測る。

調査区各所に大規模な攪乱が入るとともに、墳丘盛土、旧表土層とも完全に失っていることから、埋葬施設はすでに消滅している可能性が高い。

周堀の設計が不安定で、円弧を描かず、墳丘は範囲、形状とも明瞭ではない。

確認面での周堀幅は、3.0～3.9mを測り、調査区中央で広く、両側では幅を減じている。周堀底は船底状を呈し、北西側が深く、中央で緩やかな段差を隔てて南東側が浅くなっている。確認面からの深さ10～25cmを測る。

周堀覆土は2層に大別され、上層にロームブロックを含む暗褐色土、下層にロームブロックを多量に含む暗褐色土の堆積を認める。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

(2) 遺物

遺物は表土から器種不明の土師器・須恵器の小片若干量を検出したほかは、表土から中・近世の陶磁器類を少量検出したのみで、明らかに古墳に伴う遺物は検出できなかった。

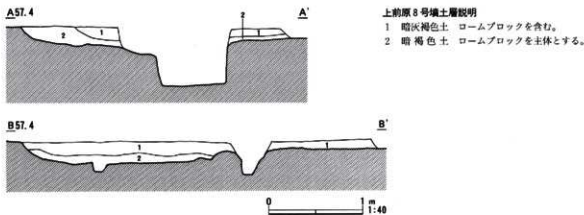
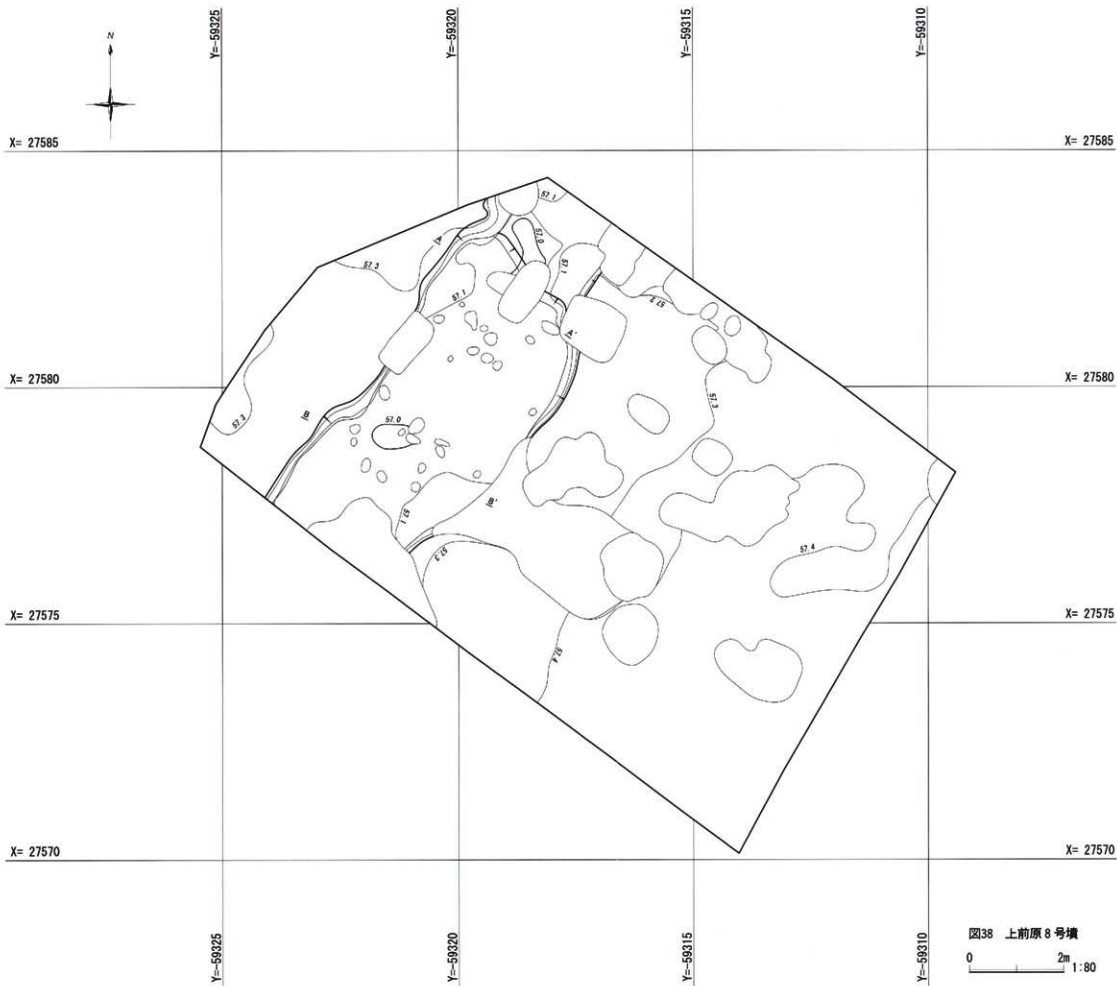


図37 上前原8号墳土層断面図



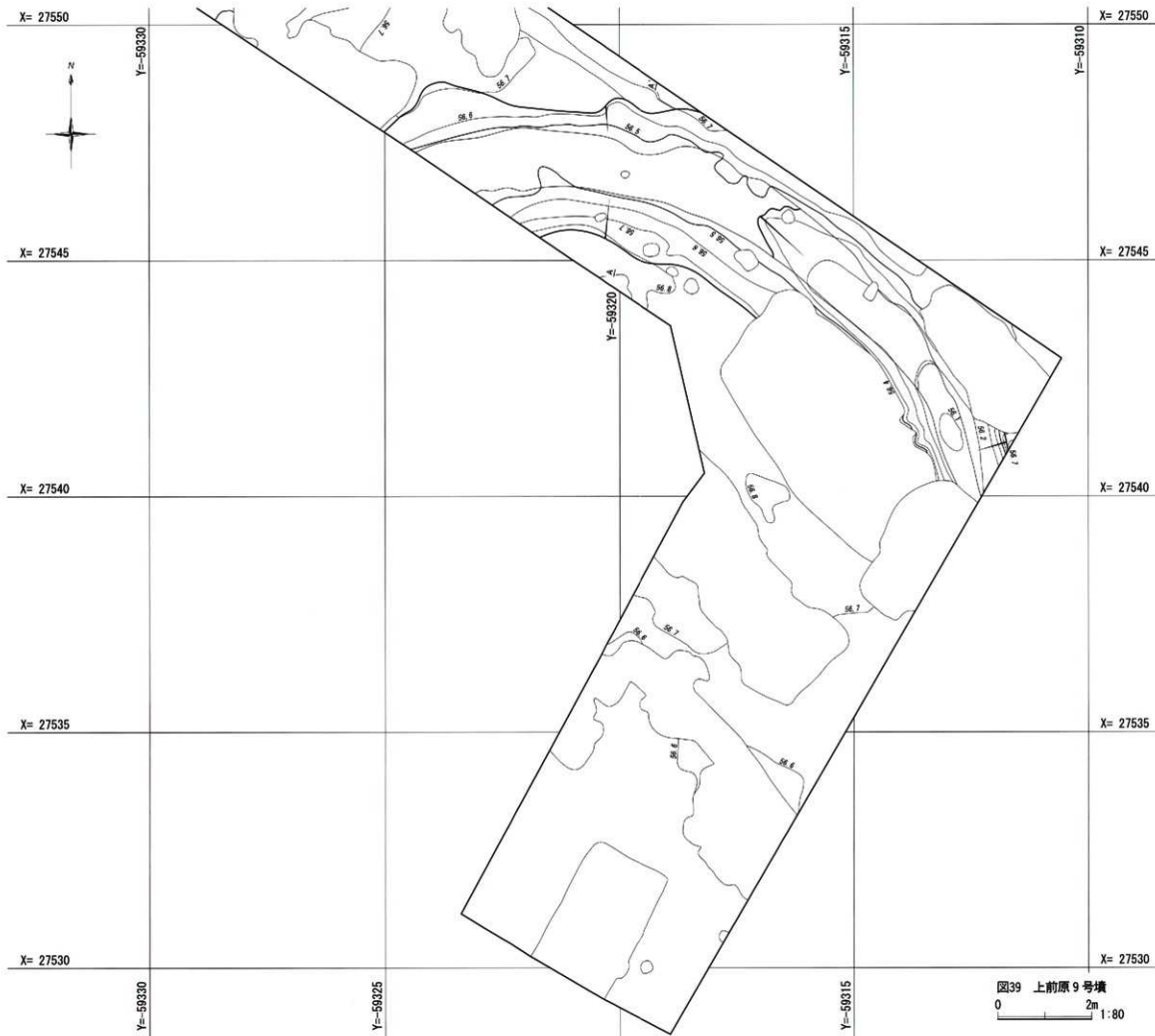


图39 上前原9号墳
0 2m 1:80

(3) 小 結

上前原8号墳は調査区内に北東から南西方向に延びる不整形の周堀を確認したのみで、墳丘との位置関係が明確ではない。周堀の北西側に墳丘が存在したと仮定すると、上前原8号墳の周堀は、上前原11号墳の周堀と連続する可能性が高く、その場合、ここで上前原8号墳とした遺構は、上前原11号墳の南東側墳丘と周堀の一部に該当するということになる。しかし、上前原11号墳は小型の円墳と考えられ、周堀平面設計の円弧が急で、上前原8号墳の周堀へは必ずしも連続しない。いっぽう、周堀の南東側に墳丘が存在したと仮定すると、上前原7号墳との中間部分に墳丘の中心が位置していたものと予測されるが、上前原7号墳と距離が短く、墳丘配置上、問題がないとは言えない。いずれにせよ、現有のデータから旧状を復原することには無理があると考えられることから、いまは上前原11号墳とは別個の古墳との認識に立ち、上前原8号墳の名称を与えとともに、以後の調査を俟ってさらに検討を加えることとしたい。

上前原8号墳の築造時期は、確実に伴出する遺物も皆無で、推測する手掛かりに乏しい。埴輪を伴わないと考えられること、周堀の掘り込みが浅く、平面設計は整円形を呈さないと推測されることなどから、7世紀に降下する可能性が考えられる。

8 上前原9号墳

[A地点]

調査期間 平成5年12月1日～平成5年12月20日

調査面積 325㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

本庄市小島2丁目地内にあって、中心をX=27,540、Y=-59,320付近におく。周囲にはともに近接して南側に上前原1号墳、東側に上前原6号墳が、やや距離をおいて、蚕影山古墳が存在する。調査着手の時点で、墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。表土層は現地表から45cm前後の厚さを測る。随所に大規模な攪乱が入り、遺構の遺存状態はきわめて不良である。墳丘部は、中心から北東側の一部を確認できた。立ち上がりは明瞭で、上端の一部に大きな攪乱が入るものの、平面設計はほぼ整円形を呈することが確認できる。墳丘径18m、周堀外径24m前後を測る円墳と推定される。

埋葬施設の構造は不明である。墳丘部は、すでに大きく攪乱を受け、墳丘盛土と旧表土層を失い、表土が直接ローム層を被覆する状態であることから、埋葬施設は完全に消滅している可能性が高い。周堀の設計は、攪乱により遺存する範囲が狭いが、北側で墳丘と平行してほぼ整円形を呈することが確認できる。確認面での周堀上幅は、2.5～3.0mを測る。立ち上がりの傾斜は内外とも緩やかで、横断面が低い逆台形を呈し、堀幅の割に堀底までが浅い。周堀底は北側では平坦面を形成しているが、北東側ではにわかに深さを増す部分が存在する。確認面からの深さは40～80cm、底幅は80cm前後を測る。なお、南側では上前原1号墳の周堀と重複することが予測される。

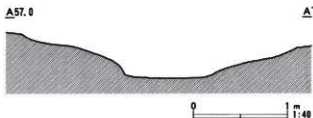


図40 上前原9号墳土層断面図

周堀覆土はロームブロックを含む黒褐色土によって占められ、As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。表土にはAs-Aの混入が目立つ。

(2) 遺物

遺物は表土から器種不明の土師器の小片若干量を検出したほか、表土および攪乱内で埴輪の細片を検出した。このうち表土から検出した土師器の小片は古墳に伴う遺物とは認定しえないが、埴輪の細片が一定量出土していることから混入とは考え難く、上前原9号墳には埴輪が樹立されていた可能性が高いと判断される。

(3) 小 結

上前原9号墳に伴うと判断された埴輪は細片のみで年代を推定しうる資料は存在しない。しかし、先述のとおり、南側で周堀が切り合う上前原1号墳出土の円筒埴輪は、本来上前原9号墳に伴うものと考えられる。よって、上前原9号墳の築造時期は、この円筒埴輪の型式から、5世紀末葉から6世紀前葉と推定される。

9 上前原10号墳

〔A地点〕

調査期間 平成9年4月10日～平成9年4月18日

調査面積 32m²

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

本庄市小島3丁目地内にあって、周囲にはやや距離をおいて南東側に上前原5号墳、南側に上前原6号墳が所在する。

北西から南東方向にのびる狭長な調査区の南東よりに周堀の一部を検出した。調査着手の時点では周辺に墳丘は存在せず、確認調査によってはじめて所在が判明した。表土層は現地表から80cm前後の厚さを測る。

周堀は大型土坑状の落ち込みとして検出しているが、わずかに残る立ち上がり部分の平面設計から、北東方向に大きく弧を描きつつ延長してゆくものと推測される。周堀外側の上端は調査区の南東端でわずかに確認できるのみで、詳細な計測値は把握できないが、周堀上幅は5mを超えるものと思われ、確認面からの深さも1.0m以上を測る。

周堀覆土は2層に大別され、上層にロームブロックを霜降り状に含む礫混じりの黒灰褐色土、下層にロームブロックを主体とし砂礫を含む暗黄褐色土およびロームブロックを含む灰褐色土の堆積を認

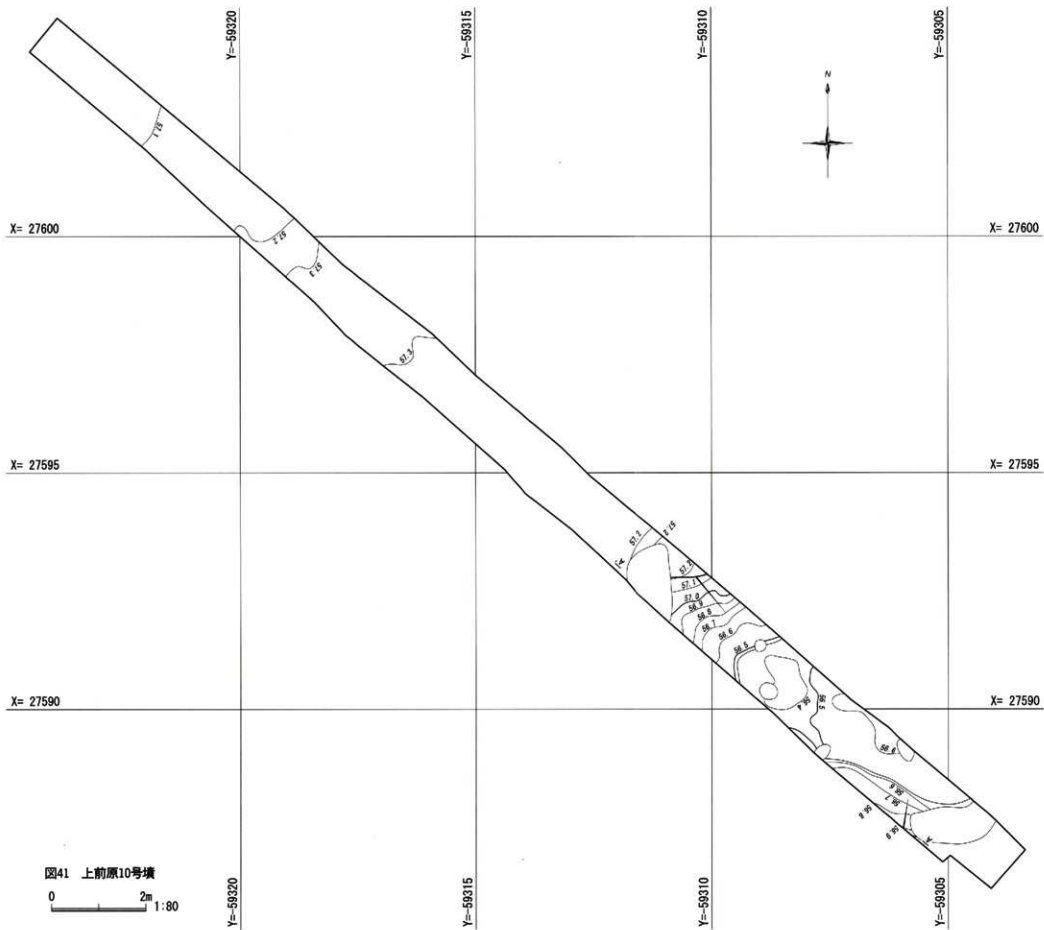


図41 上前原10号墳

0 2m 1:80

める。表土にはAs-Aを大量に混入している。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

墳丘部の立ち上がりは明瞭で、周堀底から直線的に延びて。東側から延長してきた立ち上がりのラインが、調査区内で南側へ屈曲していることから、周堀は南側でいったん途切れ、この部分に陸橋状の施設が存在した可能性が考えられる。墳丘の平面設計を推測しうだけの資料はないが、周堀が大規模であること、調査区内に墳丘北西側の周堀を検出していないことを考慮すると、墳丘径20mを超える大型の円墳となる可能性が高い。

(2) 遺物

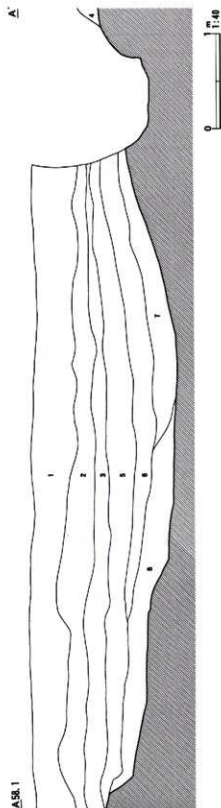
遺物は、周堀覆土および周堀上層の表土から、埴輪片、土師器片を少量検出した。埴輪片はいずれも円筒埴輪の破片である。土師器片は坏類の破片が大部分で、細かく破断しているものが多い。

埴輪 [図43、写真22]

円筒埴輪 [1・2]

1は第1段の上位から第2段の中段にかけての部分である。原形は3条突帯4段構成のやや狭長な円筒埴輪と推測される。外面調整は1次タテハケ、内面調整はナナメハケおよびタテナデである。突帯は幅が狭く、丁寧になで付けられ稜も明瞭である。透孔は小型の円形で、第1突帯から離れ、段の中段に穿たれている。上弦が突帯に接している。胎土に片岩・砂粒を含み、焼成は良好で、色調はほい黄橙色を呈する。

2は円筒埴輪の中段の破片である。外面調整は1次タテハケ、内面調整はナナメハケおよびタテナデで、胎土に片岩を



上野原10号墳土層断面

- 1 表土
- 2 灰褐色土 As-Aを含み、ざらつく。礫(径5mm)を含む。
- 3 灰褐色土 As-Aを含み、ざらつく。ロームブロックを含む。
- 4 灰褐色土 As-Aを多量に含み、ざらつく。

- 5 灰褐色土 ロームブロックを散在り状に含む。礫(径5~20mm)を含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを主体とする。砂礫を多量に多く含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを主体とする。砂礫を若干含む。
- 8 灰褐色土 ロームブロックを含む。

図42 上野原10号墳土層断面

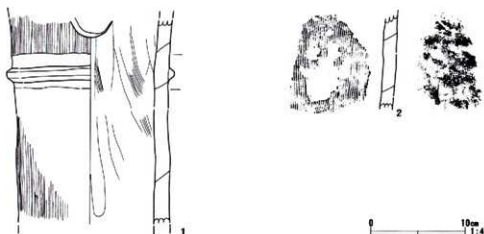


図43 上前原10号墳出土円筒埴輪実測図・拓影図

含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

土器 [図44、写真22]

土師器環 [1]

平底気味の底部から体部が湾曲して立ち上がる。口縁部と体部の境界に浅い凹線がめぐり、わずかに内彎して立ち上がる。外面調整は底部がヘラケズリで、体部にはヘラケズリののちナデを加え、口縁部はヨコナデを施している。内面調整は底部から口縁部までヨコナデである。胎土に黒色粒・白色粒を含む。焼成はやや軟質で、色調は明赤褐色を呈する。

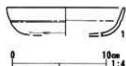


図44 上前原10号墳出土土器実測図

上前原10号墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器環	口径 (12.6) 底径 — 器高 —	口縁部と体部との境に浅い凹線。口縁部は内湾気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ、底部ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。	黒色粒・白色粒 内外—明赤褐色	

(3) 小 結

上前原10号墳は、検出した周堀の規模などから、墳径20mを超える群内でも有数の大型円墳となる可能性が高い。築造時期は、周堀出土の円筒埴輪の特徴から6世紀後葉と推定される。この円筒埴輪は3条突帯4段構成の狭長な形態で、幅の狭い突帯と小型の円形透孔を特徴とする。同類の円筒埴輪は前の山古墳(上前原4号墳)、山の神古墳、御手長山古墳など6世紀後葉段階の大型円墳に特徴的な円筒埴輪で、胎土も共通していることから同一の埴輪生産組織から、特定階層の被葬者に対し供給されたものと考えられている。

なお、土師器環は小片で混入の可能性も考えられる。

IV 結 語

本書に報告した上原地区の円墳群は、旭・小島古墳群東端部に位置し、前の山古墳、山の神古墳、小島御手長山古墳などの中・大型円墳を中心に古墳群内でも最も密度の高い分布を示している。これらの古墳の築造年代は、上原5号墳、上原7号墳のように周朝覆土中に Hr-FA の堆積を認める5世紀後半から6世紀前葉段階の古墳と、前の山古墳、小島御手長山古墳、上原1号墳など埋葬施設に横穴式石室を採用する6世紀末葉から7世紀前半段階の古墳との二時期に大別される。とくに、上原5号墳・同7号墳のように、B種ヨコハケによる外面2次調整を施す円筒埴輪を出土する古墳の存在は、旭・小島古墳群における古式群集墳の形成開始時期を解明するうえで重要である。

埼玉県北西部の児玉郡域には、県内他地域と比較して、外面2次調整にB種ヨコハケ技法を用い、窖窓により焼成するIV式の円筒埴輪を出土する古墳が多く、現在までに10数基を確認できる。これらの多くは群集墳を主体的に構成する直径10m～20m前半代の小型円墳で、群集墳の中核を占めるような中規模墳も少数存在する。

旭・小島古墳群では三空山2号墳にIV式の円筒埴輪が存在し、さらに埴輪を樹立しないものの北浦3号墳も伴出土器の型式から同時期の築造と推定される。周辺では、本庄市総合古墳群に属する本庄東小学校1号墳、同2号墳、美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳、同77号墳、児玉町生野山古墳群の生野山10号墳、同14号墳などにIV式の円筒埴輪の樹立が認められ、児玉地域全体に広域的に出現する。いっぽう、群集墳の中核的古墳には、児玉町生野山9号墳、同長沖14号墳、美里町諏訪山古墳など直径30～40m級の円墳や帆立貝形古墳が知られ、こうした状況から、児玉地域の古式群集墳は、一般に8期段階から群集墳の造営を開始する県内の他地域に先行し、前方後円墳畿内編年7期に遡って形成を開始していることは明らかで、同じく畿内編年7期に古式群集墳の形成を開始する群馬県地域と同調する現象と理解される。なお、児玉町生野山古墳群の生野山9号墳では人物埴輪・馬形埴輪が伴い、東日本では最古級の資料として注目される。

ところで、これら7期に造営を開始する群集墳には、群内に前・中期段階の墳墓を含み、これらと同一の古墳群を形成している事例が多い。旭・小島古墳群や美里町塚本山古墳群では、群内に古墳時代前期の方墳もしくは方形周溝墓が混在している。また、旭・小島古墳群、児玉町生野山古墳群、同長沖古墳群では前期末葉ないし中期前葉段階に大型円墳が築造されている。これに対し、8期に築造を開始する本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群など周辺の群集墳では、群中に先行する前期の方墳・方形周溝墓や中期の有力古墳を含まない。このことは、前・中期段階以来の在地の伝統的勢力が、他の新興勢力に先行して群集墳の造営を開始するとともに、あらたに円筒埴輪の導入を志向した事実を示すものであろう。

なお、児玉地域では児玉町長沖157号墳、美里町志戸川古墳などIII式の円筒埴輪を樹立する中期前葉段階の古墳の存在も知られているが、埴輪の生産は単発に終わったようで、IV式の円筒埴輪への連続性は認められない。IV式円筒埴輪の多くは、先に確認した主要な供給先からも推測できるように、7期においてあらたに造営を開始する古式群集墳における需要に対応するもので、新規に生産体制整備を図ったうえで供給が行われたものと考えられる。

上前原 1号墳 円筒埴輪観察表

番号	法 量 (cm)							透孔	口縁出調整	外面調整			内面調整		底厚	底底	底底	底底	底底	底底	底底	底底
	口徑	底徑	高さ	第1段	第2段	第3段	縮高			調整	調整	調整	調整	調整								
1	23.3	14.3	32.9	9.5	9.9	12.6	2.1	6.7	平円	6.4×9.6	ヨコナデ	1次タテハケ	7本・15本	—	ヨコハケ・ナメメナデ・タテナデ	—	右	棒状	良好	黄褐色	90%	内面第3段に線刻。

上前原 5号墳 円筒・朝顔形埴輪観察表

番号	法 量 (cm)							透孔	口縁出調整	外面調整			内面調整		底厚	底底	底底	底底	底底	底底	底底	底底
	口徑	底徑	高さ	第1段	第2段	第3段	縮高			調整	調整	調整	調整	調整								
1	23.5	13.9	34.7	14.7	11.8	8.2	1.8	6.5	平円	7.7×(8.2)	ヨコナデ	1段-1次タテハケ 2・3段-2次ヨコハケ	10本	—	ナメメハケ・タテナデ・指環正戻	—	右	棒状	良好	褐色	60%	外面第3段に線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
2	21.3	12.5	33.9	15.5	10.2	8.2	1.5	6.5	平円	7.2×9.0	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	10本	—	ナメメハケ・タテナデ・指環正戻	—	右	棒状	良好	褐色	90%	外面第3段に線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
3	21.8	12.5	33.9	16.1	10.3	7.5	1.7	6.6	平円	7.2×8.2	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	10本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	右	棒状	良好	褐色	60%	外面第3段に線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
4	(21.0)	13.9	(36.7)	15.8	10.0	(10.9)	1.8	6.6	平円	7.2×7.2	ヨコナデ	1段-1次ナメメハケ 2・3段-2次ヨコハケ	9本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	右	棒状	良好	褐色	75%	外面第3段に「×」の線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
5	(21.2)	13.3	34.9	15.7	(9.9)	(9.3)	1.7	6.4	平円	(6.6×8.3)	ヨコナデ	1段-1次ナメメハケ 2・3段-2次ヨコハケ	9本	—	ナメメハケ・タテナデ・タテナデ	—	右	棒状	良好	褐色	60%	片苺・海綿骨粉を含む。
6	(22.9)	(13.6)	33.2	15.7	9.8	7.7	2.1	6.7	平円	(6.7×6.1)	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	9本	—	ナメメハケ・タテナデ・指環正戻	—	右	棒状	良好	黄褐色	90%	片苺・海綿骨粉を含む。
7	(21.0)	(13.7)	(34.3)	15.5	(10.3)	(8.3)	1.8	6.5	平円	7.5×9.3	—	1次タテハケ 2次ヨコハケ	12本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	50%	外面第3段に線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
8	(24.3)	(12.8)	31.7	15.3	9.7	6.7	1.8	6.6	平円	7.2×8.7	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	12本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	右	棒状	良好	灰褐色	60%	片苺・海綿骨粉を含む。 還元気味の焼成。
9	—	13.9	—	16.6	10.7	—	2.0	6.4	平円	(7.6×5.5)	—	1次タテハケ 2次ヨコハケ	9本	—	ナメメハケ・タテナデ・指環正戻	—	—	棒状	良好	褐色	55%	片苺・砂礫(チャート)を含む。
10	—	14.1	—	15.8	10.6	—	1.8	6.7	平円	(7.7×9.5)	—	1段-1次タテハケ 2・3段-2次ヨコハケ	10本	—	タテナデ	—	右	棒状	良好	褐色	50%	片苺・海綿骨粉を含む。
11	(21.2)	—	—	—	9.9	9.2	1.5	6.7	平円	(6.5)×7.6	—	1次タテハケ 2次ヨコハケ	9本	—	ナメメハケ・タテナデ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	30%	外面第3段に「×」の線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
12	(22.4)	—	—	—	10.8	8.2	2.0	6.4	(平円)	—	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	10本	—	ナメメハケ・タテナデ・指環正戻	—	—	—	良好	赤褐色	25%	外面第3段に線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
13	23.9	—	—	—	—	9.3	2.2	6.8	(平円)	—×(10.8)	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	10本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	30%	外面第3段に線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
14	(22.0)	—	—	—	—	—	—	—	(平円)	—	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	10本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	10%	外面第3段に「×」の線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
15	(25.0)	—	—	—	—	2.9	9.6	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	10本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	10%	外面第3段に線刻。 片苺・海綿骨粉を含む。
16	(25.2)	—	—	—	—	(9.2)	1.5	9.8	—	—	ヨコナデ	2次ヨコハケ	9本	—	ナメメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	灰赤褐色	10%	第3段外面に線刻。片苺・海綿骨粉を含む。焼成が著しい。

番号	法			量 (cm)			突帯		透孔		口縁部調整	外面調整			内面調整			底面	焼成	色調	残存率	備考		
	口径	底径	脚高	第1段	第2段	第3段	幅	高さ	形態	径		調整		基部	調整		基部						巻き	目盛
												ハク本数 (1/2cm)	調整		調整	調整								
17	—	—	—	—	9.6	—	1.8	0.6	半円	—	—	1段—1次タテハケ 2・3段—2次ヨコハケ	9本	—	ナメハケ・ナメナ デ	—	—	—	良好	褐色	15%	第3段外面に「×」の線刻。 片岩・海綿骨針を含む。		
18	—	—	—	—	—	—	1.5	0.6	半円	—	—	2・3段—2次ヨコハケ	9本	—	ナメハケ・ナメナ デ	—	—	—	良好	にぶい褐色	10%	第3段外面に線刻。片岩・海綿骨針 を含む。還元気味の焼成。		
19	—	—	—	—	—	—	1.7	0.5	—	—	—	1段—1次タテハケ 2段—2次ヨコハケ	10本	—	タナデ	—	—	—	良好	褐色	10%	片岩・海綿骨針を含む。		
20	—	(18.0)	—	16.3	—	—	1.7	0.5	—	—	—	1段—1次タテハケ 2段—2次ヨコハケ	10本	—	タナデ	—	—	棒状	良好	褐色	15%	片岩・海綿骨針を含む。		
21	—	(13.4)	—	15.5	—	—	1.8	0.6	—	—	—	1次タテハケ 2次ヨコハケ	11本	—	タナデ・ヨコナデ・ 腹面直造	—	右	棒状	良好	橙—黄灰色	25%	片岩・海綿骨針を含む。 一部還元気味の焼成。		
22	—	14.2	—	15.6	—	—	1.7	0.7	—	—	—	1段—1次ナメハケ 2段—2次ヨコハケ	10本	—	ナメハケ・タナデ	—	右	棒状	良好	褐色	40%	片岩・海綿骨針を含む。		
23	—	(13.0)	—	16.0	—	—	1.9	0.5	—	—	—	1段—1次ナメハケ 2段—2次ヨコハケ	9本	—	ナメハケ・タナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	30%	片岩・海綿骨針・赤褐色殻を含む。		
24	—	(17.7)	—	11.2	—	—	2.3	0.9	—	—	—	1次タテハケ	7本	ヨコハケ	ナメハケ・ナメナ デ	—	右	—	良好	褐色	10%	多量空部か。 片岩・海綿骨針を含む。		
25	—	(16.0)	—	16.6	—	—	0.7	0.3	—	—	—	1段—1次タテハケ	13本	—	タナデ	—	右	—	良好	橙—にぶい黄褐色	15%	片岩・海綿骨針を含む。 外面に線刻あり。		
26	—	(17.3)	—	14.3	—	—	1.8	0.8	—	—	—	1段—1次タテハケ	11本	—	タナデ	—	左	棒状	良好	褐色	20%	片岩・海綿骨針を含む。		
27	—	(13.9)	—	15.3	—	—	2.0	0.4	—	—	—	1段—1次タテハケ	11本	—	タナデ・ナメナ デ	—	—	—	良好	明赤褐色	20%	片岩・赤褐色殻を含む。		
28	—	14.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ 2次ヨコハケ	8本	—	タナデ	—	右	棒状	良好	褐色	20%	片岩・海綿骨針を含む。		
29	—	(15.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ 2次ヨコハケ	9本	—	タナデ・腹面直造	—	—	棒状	良好	褐色	10%	片岩・海綿骨針を含む。		
30	—	—	—	—	—	9.4	2.0	0.6	(半円)	—	—	2次ヨコハケ	12本	—	ナメハケ・タナデ	—	—	—	良好	明褐色	5%	片岩・海綿骨針を含む。 摩滅が著しい。		
31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	2次ヨコハケ	11本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩・海綿骨針を含む。		
32	—	—	—	—	—	—	—	0.6	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	12本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	短尺黄—にぶい黄 褐色	5%	第3段外面に線刻。片岩・海綿骨針 を含む。還元気味の焼成。		
33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	9本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩・海綿骨針を含む。		
34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ 2次ヨコハケ	12本	—	ナメハケ・ヨコナデ	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩・海綿骨針を含む。		
35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	10本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩・海綿骨針を含む。		
36	—	—	—	—	—	—	1.9	0.6	半円	—	—	2次ヨコハケ	12本	—	ナメハケ・タナデ	—	—	—	良好	明褐色	5%	片岩・海綿骨針を含む。 摩滅が著しい。		

番号	法 量 (cm)									穴径	造 孔	U値定 額 型	外 面 調 整			内 面 調 整			底 部	焼成	色 調	残存率	備 考				
	口径	高さ	製高	第1段	第2段	第3段	軸 高	形 態	径				調 整	ハ>本表 (1/2cm)		調 整	調 整	基 部						調 整	基 部	色 差	圧 痕
														調 整	基 部												
37	-	-	-	-	-	-	2.0	0.6	平円	-	-	2次ロコハケ	11本	-	ナメハケ・タナダ	-	-	-	良好	にぶい褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。焼成が美しい。					
38	-	-	-	-	-	-	2.0	0.8	-	-	-	2次ロコハケ	8本	-	タナダ	-	-	-	良好	黄褐色にぶい黄褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					
39	-	-	-	-	-	-	1.7	0.5	平円	-	-	2次ロコハケ	12本	-	ナメハケ・ナメナダ	-	-	-	良好	褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					
40	-	-	-	-	-	-	1.8	0.6	平円	-	-	2次ロコハケ	8本	-	ナメハケ・タナダ	-	-	-	良好	褐色	5%	外周第2段に剥離。片岩・麻酔骨針を含む。焼成が美しい。					
41	-	-	-	-	-	-	1.3	0.6	平円	-	-	1次タテハケ 2次ロコハケ	8本	-	タナダ	-	-	-	良好	褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					
42	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1次タテハケ 2次ロコハケ	12本	-	ナメハケ・タナダ	-	-	-	良好	褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					
43	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1次タテハケ	14本	-	タテハケ	-	-	-	良好	明褐色	5%	外壁に剥離。小選し孔あり。片岩・麻酔骨針を含む。					
44	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1次タテハケ 2次ロコハケ	9本	-	ナメハケ・タナダ	-	-	-	良好	にぶい黄褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					
45	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1次タテハケ 2次ロコハケ	11本	-	タナダ	-	-	-	良好	褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					
46	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1次ナメハケ	9本	-	ナメナダ	-	-	-	-	褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					
47	-	(14.1)	-	①15.3②10.2③10.6 ④5.2⑤3.9⑥-	-	-	1.8	0.5	⑦円 ⑧平円	6.0×6.2 8.2×6.8	-	1~3段-2次ロコハケ 4・5段-1次タテハケ 6段-1次ナメハケ	9本	-	ナメハケ・ロコハケ・タナダ	-	-	-	推状	黄~明褐色	70%	外周第4段に剥離。片岩・麻酔骨針・鏝(チャート)を含む。					
48	-	-	-	-	-	-	2.0	0.6	-	-	-	5段-1次タテハケ 6段-1次ナメハケ	9本	-	ナメハケ	-	-	-	良好	褐色	5%	朝顔形。片岩・麻酔骨針を含む。					
49	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5段-1次タテハケ 6段-1次ナメハケ	9本	-	ロコハケ・ロコナダ	-	-	-	-	褐色	5%	朝顔形。片岩・麻酔骨針を含む。					

上原7号墳 円筒埴輪観察表

番号	法 量 (cm)									穴径	造 孔	U値定 額 型	外 面 調 整			内 面 調 整			底 部	焼成	色 調	残存率	備 考				
	口径	高さ	製高	第1段	第2段	第3段	軸 高	形 態	径				調 整	ハ>本表 (1/2cm)		調 整	調 整	基 部						調 整	基 部	色 差	圧 痕
														調 整	基 部												
1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ロコナダ	1次タテハケ	4本	-	ナメハケ	-	-	-	良好	褐色	5%	片岩を含む。				
2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ロコナダ	1次タテハケ	13本	-	ナメナダ・タナダ	-	-	-	良好	棕色	5%	外周に剥離。片岩・麻酔骨針を含む。				
3	-	-	-	-	-	-	1.6	0.4	-	-	-	2次ロコハケ	11本	-	ナメハケ・タナダ	-	-	-	良好	褐色	5%	片岩を含む。					
4	-	-	-	-	-	-	2.4	0.8	-	-	-	2次ロコハケ	11本	-	ナメナダ	-	-	-	良好	褐色	5%	片岩・麻酔骨針を含む。					

番号	法						突帯 幅高	帯 形状	透孔 径	口縁部 調整	外面調整			内面調整			底型 巻き 圧取	焼成	色調	残存率	備考			
	口径	高さ	果 (cm)			調整					ハク本数 (/2cm)	基部	調整	基部	巻き 圧取	焼成						色調	残存率	備考
			第1段	第2段	第3段																			
5	—	—	—	—	—	2.0	0.4	—	—	—	1段-1次タテハケ	7本	—	ナメナデ・タテナデ	—	—	—	良好	赤赤黒	5%	片岩・海綿骨刺を含む。			
6	—	—	—	—	—	2.5	0.5	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテナデ・膨脹圧取	—	—	—	良好	にぶい黄褐色にぶい褐色	10%	片岩・海綿骨刺を含む。			
7	—	—	—	—	—	1.9	0.5	円	(5.0×5.5)	—	1次タテハケ	9本	—	タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	10%	片岩を含む。膨脹形内面調整もしくは膨脹縮減基合型の可能性。			
8	—	—	—	—	—	1.5	0.5	—	—	—	1次タテナデ 2次コソハケ	10本	—	ナメハケ・タテハケ	—	—	—	良好	灰黄褐色	5%	片岩・海綿骨刺を含む。 還元状態の焼成。			
9	—	—	—	—	—	2.0	0.4	—	—	—	1次タテナデ	4本	—	タテナデ・膨脹圧取	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩・海綿骨刺・砂礫(チャート)を含む。			
10	—	—	—	—	—	1.9	0.5	—	—	—	1次タテナデ	6本	—	ナメハケ・タテナデ・膨脹圧取	—	—	—	良好	褐色	5%	外面に結晶。 片岩・海綿骨刺を含む。			
11	—	—	—	—	—	2.1	0.4	—	—	—	1次タテナデ	4本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	5%	片岩・海綿骨刺を含む。			
12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	—	—	ナメナデ	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩・海綿骨刺を含む。 膨脹が著しい。			
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	11本	—	タテナデ・ナメハケ	—	—	—	良好	褐色	5%				
14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	6本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	5%	片岩・海綿骨刺・砂礫(チャート)を含む。			
15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	6本	—	ナメハケ	—	右	板目状	良好	褐色	5%	片岩を含む。			
16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	7本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	5%				
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	8本	—	ナメナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	5%				
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	12本	—	ナメハケ・ナメナデ	—	—	—	良好	褐色	5%				
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	8本	—	タテナデ・ナメナデ	—	—	—	良好	褐色	5%				

上前原10号墳 円筒埴輪観察表

番号	法						突帯 幅高	帯 形状	透孔 径	口縁部 調整	外面調整			内面調整			底型 巻き 圧取	焼成	色調	残存率	備考			
	口径	高さ	果 (cm)			調整					ハク本数 (/2cm)	基部	調整	基部	巻き 圧取	焼成						色調	残存率	備考
			第1段	第2段	第3段																			
1	—	—	—	—	—	1.5	0.5	—	—	—	1次タテナデ	7本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	25%				
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテナデ	9	—	ナメナデ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	5%				

【引用・参考文献】

- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成畿内編』山川出版社 東京 pp.24-26.
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 「有勝寺北裏遺跡」有勝寺北裏遺跡調査会 東京.
- 恋河内昭彦 1996 「第V章まとめ」『辻堂遺跡Ⅰ—県営水田農業確立排水対策特別事業（やばり川地区）に伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書—』見玉町文化財調査報告書第19集 見玉町教育委員会 見玉郡見玉町 pp.63-90.
- 松本 完 2002 「大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北堀前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書—新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ—」本庄市遺跡調査会報告第6集 本庄市遺跡調査会 本庄.
- 美里町 1986 「第二章第四節 古墳時代」『美里町史』通史編 見玉郡美里町 pp.135-191.
- 中村會司 1999 「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 藤沢 pp.91-118.
- 並木 隆 1976 「7 本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘報告会発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会 浦和 pp.8-9.
- 南毛古墳文化研究会 2001 「本庄市域における古式古墳調査の成果と課題」第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄.
- 太田博之 1991 「本庄遺跡群発掘調査報告書V—公卿塚古墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市教育委員会 本庄.
- 埼玉県 1982 「下野堂（しものどう）古墳群」『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳 浦和 pp.674-677.
- 埼玉県立本庄高等学校考古学部 1975 「いぶき」8・9合併号
- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪編年の諸問題」『埴輪の変遷—その普遍性と地域性—』北武蔵古代文化研究会 pp.63-69.
- 1986 「埼玉における前期古墳の形成」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 浦和 pp.204-207.
- 埼玉県教育委員会 1994 「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」浦和.
- 菅谷浩之 1976 a 「下野堂遺跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.59-62.
- 1976 b 「有勝寺北裏埴輪窯跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.100-103.
- 1976 c 「赤坂埴輪窯跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 p.103.
- 1984 「北武蔵における古式古墳の成立—見玉地方からみた北武蔵の古式古墳—」見玉町史資料調査報告 古代第1集 見玉町教育委員会・見玉町史編纂委員会 見玉郡見玉町.
- 鈴木徳雄 1983 「第II章 遺跡の地理的・歴史的環境」『阿知越遺跡Ⅰ』見玉町文化財調査報告第3集 見玉町教育委員会 見玉郡見玉町 pp.3-6.
- 山川守男・盛敬彰・金子彰男・中村正明・橋本雅夫・松本和弘 1981 「新発見の埴輪窯跡群」『いぶき』12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 本庄 pp.29-40.
- 柳 進 1961 「見玉町八幡山埴輪焼場跡発掘調査報告書」埼玉県立見玉高等学校 見玉郡見玉町.
- 早稲田大学有勝寺北裏遺跡調査会 1979 「埼玉県本庄市前山有勝寺北裏遺跡発掘調査概要」東京.

写 真



上前原1号墳A地点
調査区全景【西から】



上前原1号墳A地点
周堀検出状況【南から】



上前原1号墳A地点
周堀検出状況【南から】

写真 2



上前原1号墳A地点
周堀覆土堆積状況〔西側周堀北壁〕



上前原1号墳A地点
周堀覆土堆積状況〔南側周堀東壁〕



上前原1号墳C地点
周堀検出状況〔北東から〕



上前原2号墳A地点
調査区全景【南西から】



上前原2号墳A地点
周堀検出状況【南西から】



上前原2号墳B地点
調査区全景【北東から】

写真 4



上前原2号墳C地点
上前原11号墳A地点
調査区全景 [南から]



上前原2号墳C地点
上前原11号墳A地点
調査区全景 [北東から]



上前原2号墳C地点
周堀検出状況 [南から]



上前原3号墳A地点
調査区全景【北東から】



上前原3号墳A地点
調査区全景【南西から】



上前原3号墳A地点
周堀礫検出状況【北から】



上前原3号墳A地点
周堀確検出状況【西から】



上前原3号墳A地点
周堀覆土堆積状況【南側周堀】



上前原3号墳A地点
周堀内土坑検出状況【南側周堀】



上前原3号墳B地点
調査区全景 [北東から]



上前原3号墳B地点
周堀内遺物出土状況 [北から]



上前原3号墳C地点
調査区全景 [北西から]



上前原5号墳A地点
調査区全景【西から】



上前原5号墳A地点
周堀内遺物出土状況【南から】



上前原5号墳A地点
周堀内遺物出土状況【北西から】



上前原5号墳A地点
周堀内遺物出土状況【西から】



上前原5号墳B地点
周堀内遺物出土状況【南東から】



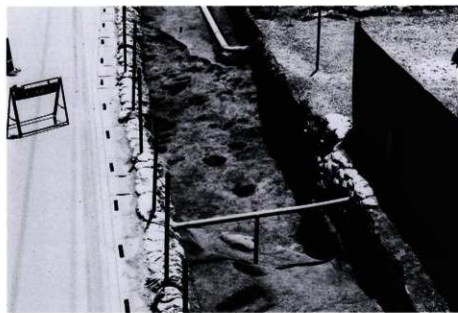
上前原5号墳B地点
周堀内遺物出土状況【北西から】



上原5号墳B地点
周堀内遺物出土状況【北から】



上原5号墳B地点
周堀検出状況【南東から】



上原5号墳B地点
周堀検出状況【北西から】



上前原6号墳A地点
調査区全景〔南西から〕



上前原6号墳A地点
周堀検出状況〔南から〕



上前原7号墳A地点
調査区全景〔南東から〕



上前原7号墳A地点
周堀検出状況 [南西から]



上前原8号墳A地点
調査区全景 [南西から]



上前原8号墳A地点
周堀検出状況 [北西から]



上前原10号墳A地点
調査区全景 [南東から]



上前原10号墳A地点
周堀内遺物出土状況 [南東から]



上前原10号墳A地点
周堀検出状況 [南東から]



〔円筒埴輪 1〕

〔土師器坏 1〕

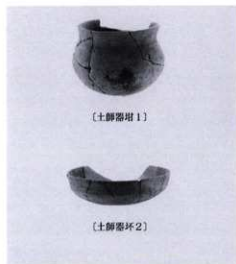
〔土師器坏 2〕

上前原 1 号墳出土円筒埴輪 1・土師器 1・2



〔土師器坏 1〕

上前原 2 号墳出土土師器 1



〔土師器坏 1〕

〔土師器坏 2〕

上前原 3 号墳出土土師器 1・2



〔円筒埴輪 1〕

〔円筒埴輪 2〕

上前原 5 号墳出土円筒埴輪 1・2



上前原5号墳出土円筒埴輪3~6



〔円筒埴輪7〕



〔円筒埴輪8〕



〔円筒埴輪9〕



〔円筒埴輪10〕

上前原5号墳出土円筒埴輪7～10



〔円筒埴輪 11〕



〔円筒埴輪 12〕



〔円筒埴輪 13〕



〔円筒埴輪 14〕



〔円筒埴輪 15〕



〔円筒埴輪 16〕



〔円筒埴輪 17〕



〔円筒埴輪 18〕



〔円筒埴輪 19〕



〔円筒埴輪 20〕

上前原5号墳出土円筒埴輪11～20



〔円筒埴輪21〕



〔円筒埴輪22〕



〔円筒埴輪23〕



〔円筒埴輪24〕



〔円筒埴輪25〕



〔円筒埴輪26〕



〔円筒埴輪27〕

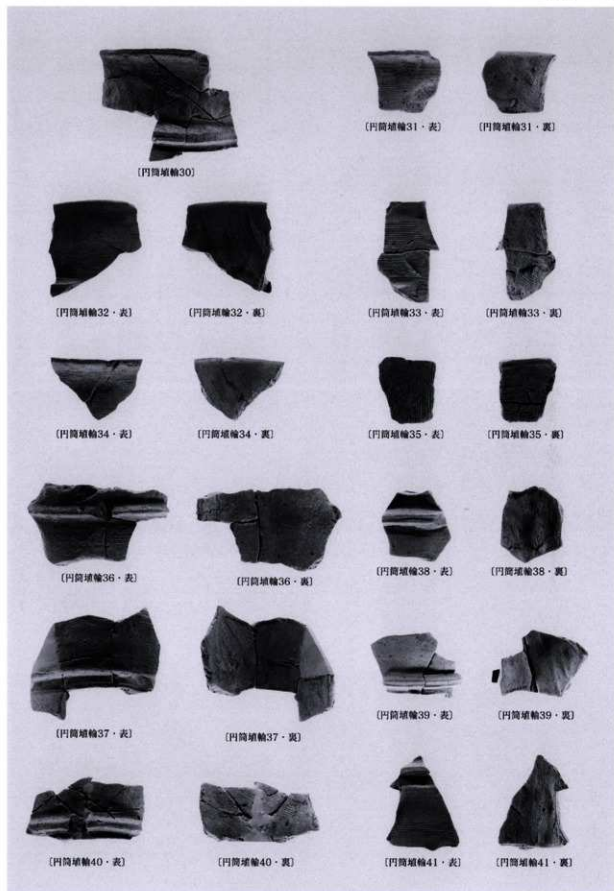


〔円筒埴輪28〕



〔円筒埴輪29〕

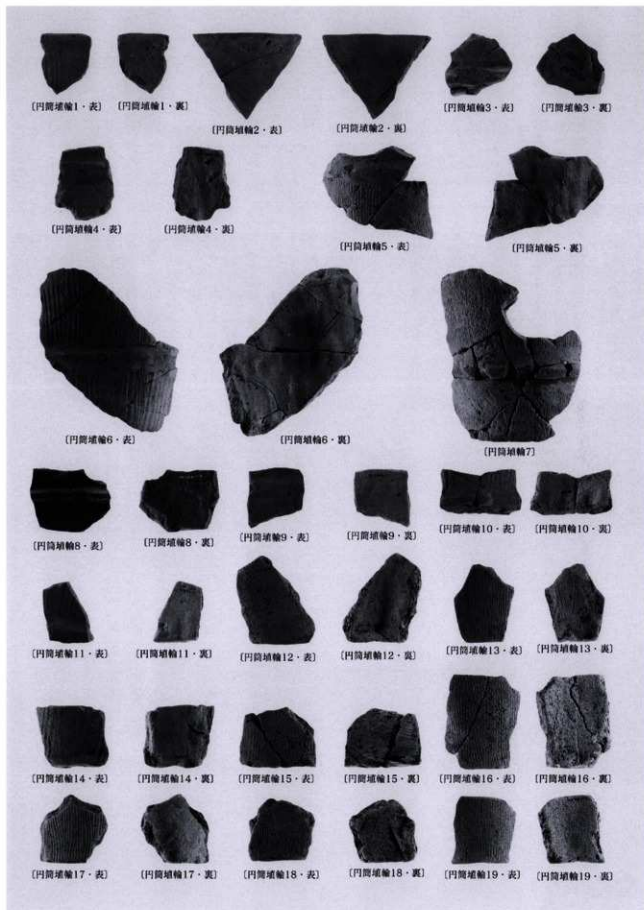
上前原5号墳出土円筒埴輪21～29



上原原5号出土円筒埴輪30~41



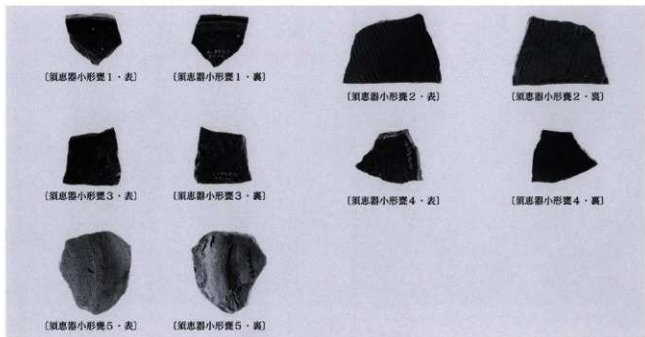
上前原5号墳出土円筒・朝顔形埴輪42~49・土師器1



上前原7号墳出土円筒埴輪1～19



上前原7号墳出土形象埴輪1・2



上前原7号墳出土須恵器1～5



上前原10号墳出土円筒埴輪1・2・土師器1

報告書抄録

ふりがな	あきひ・おじまこふんぐん かみまえはら ごうふん							
書名	旭小島古墳群 上原原1～3・5～11号墳							
副書名	小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書II							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2004 (平成16) 年3月31日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯 ''''	東経 ''''	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
旭・小島古墳群	埼玉県本庄市 小島3丁目 1676番-1他	112119	171	36°14'48"	139°10'19"	1990.03.05～ 2003.04.08	4,969m ²	区画整理
所取遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳群	古墳	古墳時代中・後期		古墳		埴輪、土師器、須恵器		

本庄市埋蔵文化財調査報告 第27集

旭・小島古墳群

一 上前原1～3・5～11号墳 一

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書II

平成16年3月25日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

